
悪魔のおせっかい

北町 スイテイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔のおせつかい

【Nコード】

N5686H

【作者名】

北町 スイテイ

【あらすじ】

あさのけんいち

浅野健一は、今年から魔法学園セイスに通う15歳。ごく一般的に見える彼だが、そんな彼には、とても重大な秘密が……。目立つことが嫌いな健一がドンドン目立っていく、ちょっとシリアスなコメディです!!。

プロローグ（前書き）

こんにちは、北町 スイティと申します。

今回が初めての投稿です。表現が下手なことや、漢字のまちがいが沢山あると思いますが、見つけたら遠慮せずにビシバシ言ってください。

ブローグ

ブローグ

激しい雨の中、俺は、倒れている。

俺の体は、どうやら幼児化されたようだ。体の節々も痛みとてもじやないが動けない。でも今はそんなことより、『生き残った』という事実がなによりも痛かった。

なんでなんでなんでなんでっ

「まだ苦しめというのか！！こんな姿にしていっただい何をしろというんだ！！。」

俺は、叫んだ。腹の底から、何度も何度も・・・。

・・・涙を流しながら・・・

プロローグ（後書き）

今回、私のはじめての作品に、目を通していただきありがとうございました。

もしよかったら、今後ともよろしくお願いします。

ブログ 浅野 健一（前書き）

短いですが、ちょっと早めに更新させていただきました。おそらく本編が始まるまで結構かかるので、しばらくはこのペースです。ちよくちよくみにきてくれるとなによりです。

プロローグ 浅野 健一

びびびびびっ………

鳴り響く目覚まし時計の電子音。

「んあ。」

しかし、今日の電子音は何か違う。突然電子音がとまり、それから・

・

「起きんかあ！バカモノ！！！！。」

オヤジの声、いや怒鳴り声が鳴り響いた。

あさのけんいち

俺の名は、浅野健一黒髪に黒い目そしてめがね、魔法学園セイスに今年から入る15才だ。今は、一人暮らしだが一応オヤジとオフクロがいる。でも血のつながった親子ではない。今のオヤジが道端で倒れていた俺を家に連れ込み、家も家族もない俺を親戚に無理言って引き取ったのだ。それからオフクロと二人で俺を大事に育ててくれた。まあ、俺にとっちゃあ本当のオヤジとオフクロだ。

そんなこんなでたしかに感謝はしているが、この目覚まし時計はどうかと思う。オフクロが家を出るときに渡した時計だが、まさかオヤジの声を入れているとは困ったオフクロだ。

本当はずっとそばに居たいのだが、オヤジが

「お前には、魔法の才能がある。」

と、まったく譲らないのだ。しかたなく俺は、試験を受け見事合格わざと落ちる手もあったが、おそらくオヤジにばれるだろう。

こんな感じで俺のことは、大体紹介した……わけでもないがそれは、のちのち。

今日は入学式だ。はつきり言ってめんどい。それに………

「ねっ、ケンちゃんも緊張するよね。」
そういつて俺について来るのが河野 鳴海かわのなるみ活発そうな瞳、そして肩の上まで伸び茶色かった髪、10人中10人が振り返る美少女だ、俺の住んでいるマンションの部屋の隣に住んでいる。偶然かそれとも運命か、こいつとは幼馴染だ。昔から事あるごとに殴られた記憶しかないという暴力女でもある。そしてこいつが隣にいる「こいつも受かった」というわけだ。

「ねえねえ、聞いてるの！」

俺的にはあまり目立ちたくない。しかし、とにかくこいつはもてる（いったいこいつのどこがいいんだか）そのせいで何度事件に巻き込まれたか・・・。

「・・・話を・・・。」

その証拠にさっきから周りの視線（主に男子）が痛い・・・痛い・・・痛い？。

「聞け——————！！。」

「ぐふあ！」

気づいたら空を飛んでいた、いや吹っ飛んでいた。おそらく、いや確実に犯人はあいつだ

「私を無視するとは、いい度胸ね。」

河野 鳴海。それを確認するとともに、俺は意識を手放した。

ブログ 浅野 健一（後書き）

なかなか悪魔が出せません。意外と話の流れを考えるのって難しいですね。では、また次回会えることを願います。

保健室の魔女（前書き）

時間がかかりましたが更新です。

保健室の魔女

次に目を覚ましたのは、どこか白い天井の部屋だった、一応死ななかつたらしい。しかし、起きた瞬間ピンチだ！。なぜかって？それは・・・

「や、やめてください！。」

「いいでしょ、お姉さんがやさしくし・て・あ・げ・る。」

目の前に、この部屋ほけんしつの主である人間が迫っているからだ。どうしてこうなったかというと、この教師が気絶している俺を寝かせるときに、眼鏡を取ったことが始まりだ。

「お姉さんびっくりしちちゃった。眼鏡とつたら、いい男だったんだもん。あなたみたいなイケメン合コンでもあえないわ。」

イケメンかどうかは知らないが、この先生のこのみだったらしい。普段からできるだけ目立たないようする俺は、眼鏡（もちろんダメ眼鏡）などをつけて地味な格好をしている。俺はあまり気にしないのだが、鳴海が

「眼鏡している方が目立たないよ！& a m p ; # 8 2 5 2 ;。」

と、今にも殴りかかりそうな勢いで言っていたので、殴られたくないのと、目立たないという理由で付けている。まさか眼鏡を取るだけでこんな事態になるなんて・・・

これからは念のため、人前では出来るだけ眼鏡を取らないようにしようと思った。

「健一君、もう逃げられないよ。」

と、後悔をしているうちに保健室の角に追い詰められた。

「せ、先生、す、ストップです。」

「だゝめ。」

先生がじわりじわりと近づいてくる。

（もうダメだ・・・。）

俺は諦めて目を閉じた。

保健室の魔女（後書き）

なかなか進みません。感想待ってます。

ロッキング シルバー（前書き）

感想待っています。

ロックリング シルバー

俺は、諦めた

（力を使うしかないか・・・。）

瞳を閉じ『魔法の方』の魔力をたしかめる・・・

（ん？）

するとおかしなことがわかった。

（魔力が感じられない）

そう、俺の体から、魔力が感じられないのだ。その間にも先生が近づいて来る。

俺は、瞳を開けて、？ という顔をした。それを見た先生は、「フツ」

と笑い「魔法、使おうとしても無駄よ。」

俺は、その笑みの意味がわからなかった。しかし、自分の右手首を見てハツとした。

「気づいたみたいね。それは・・・。」

俺の右手首には、銀色の腕輪がつけられていた。しかし、これはただの腕輪じゃない

「ロックリング シルバー。」

ロックリング シルバー。

このリングは、体の中にある魔法を使うための魔力を打ち消す特別な鉱物を腕輪にしたもので、これをつけている間は、魔法がまったく使えないという恐ろしい代物だ。おまけにつけた本人しか取れない。

「な、何でこんなものが！！。」

「あなたが寝ている間につけさせてもらったわ。」

（俺としたことがあああ！！）

そしていつの間にか先生との距離ものこり30センチとなった。このままでは確実に・・・その、なんだ、キ、キスを、キスを・・・

なんかどきどきしてきた。

だって、言ってなかったけど、この先生、あれだよ！なんか腰まで伸びた桃色の髪に青い瞳、おまけに小さな唇。めちゃくちや美人で、おまけにボツキュッボンツだぜ！！どきどきしない方がおかしい。

一瞬

（このまましてもよくねえ）

と考えてしまった。しかしそこはぐつと堪え、逃げるために思考をめぐらせる。そして導き出した答えが……

ロッキング シルバー（後書き）

点をつけるタイミングがつかめません。アドバイスがもらえたらうれしいです。

悪魔の力（前書き）

やっと悪魔が出せました。

悪魔の力

今俺の目の前では、先生（ちなみに名前は、山野 瑠美^{やまのるみ}）が倒れている。

魔法の魔力が使えない状態で、俺が導き出した答え、それは……
『魔法の魔力以外の魔力で魔法を使う』ということだ。

俺は、もう一度ゆっくりと瞳を閉じた。

そして、今自分の中にある『魔力』と、自分の中でうごめいている『もうひとつの力』を入れ替える。

じわり、じわりと体が熱くなっていく、そして瞳を開き、迫っている先生の瞳を見据え、心の中で呟く

（………眠れ……）
すると

「あ、あれ。急に眠気が、いった……い……な………。」

「ばたっ。」

先生は、崩れ落ちた（ねむった）。

俺は、先生が完全に眠っているか確認。そして床に眠る先生をベツトに寝かせ、腕輪を先生の手を借り外した。最後にまた力を入れ替え『メモリー』。

魔法で俺の素顔の記憶を消させてもらった。

と、こんな感じで助かったというわけだ。

ちなみに『人間』が俺と同じようなことをすることは、不可能だ。

なのにどうして俺にできるか。そんなこと簡単だ。なぜなら俺は・
・・・・

悪魔だからだ

そう、俺は、悪魔。いや、正確には『悪魔落ち』だ。

悪魔落ちとは、魔界で大罪を犯し、人間界に落とされた悪魔もことだ。おまけに悪魔落ちは、人間界に落とされるだけではなく、力の大半をしめる羽をもぎ取られる。もちろん俺の背中にも、羽がもぎ取られた跡がある。このことを知っているのは、オヤジだけだ。

人間界に落とされた悪魔は、魔力が低いものほど早く死ぬ。

しかし俺は、元々の魔力が強かったたた力を使わなければ、あと150年はいける。ちなみに俺の羽はまだ生きてはいる。どこかに封印されているみたいだが。

羽さえあれば、生きられる時間も、魔力も取り戻せる。

そのつもりは、さらさらないが。

(さっきので2日ってところか)

「まあ、気にしてもしようがないか。」

そう呟いて、おそろく始まっているであろう入学式に向かった。

悪魔の力（後書き）

なかなかアイデアが浮かばない・・・。

クラスメイトは・・・

あの後入学式の会場に向かったが、俺が会場に来たときには、すでに入学式は終わっていた。（どうせ校長の話だけだしまあいいか。）まあ、そんな感じで今はクラス分けを見ている。

俺の名前は・・・

『1年E組』

「E組か。」

この学園では、1クラスA～G組まであり、それぞれ40人ずつ生徒が居る。そしてこの学園は、生徒同士の交流を大切にしている、クラスは、性別、名前、成績関係なく振り分けられる。

俺は、早速自分の教室に向かった。

このあと俺は、他の生徒名前を確認しなかったことを後悔する。

教室

ガラガララ

『がやがや』

『がやがや』

教室に入っではじめに見たのは、何かに群がるクラスメイトであるうかたまりが2つ。いったい何に群がって居るんだ？。

ために2つのかたまりの間あたりの席に座り、入口の方の話を聞いてみた。

「本堂君、好きな食べ物とかありますか。」

「俺は、梨が好きだな。」

「好きな女の子のタイプは。」

「やさしい、女の子かな。」

『きや～～～』

ふむふむ、なるほど。入学そうそう、女子の人気者になった男子が居るらしい。

さて、もう片方のかたまりは・・・

「あ、あの、好きなタイプとかおしえてもらえますか。」

「特にないわ。」

「ねえねえ、彼氏とかいるの？」

「いない。」

「好きな人とかは」

「秘密ね。」

『きゃ〜』

『おおおお』

こっちは、男女ともに人気者になったようだ。それにしても、さっきの声、どこかで聞いた気がする・・・気のせいかな。

俺は、しばらくそのかたまりを見ながら（誰も俺には気づいてない）、クラスのみんなに、質問攻めされる二人を、憐れんだ瞳で見つめていた（姿はみえないが）。するとふいに

「あつ、ケンちゃん！」

という声が、『2つめのかたまりから』聞こえてきた。

俺は、とてつもなくやな予感がした。が、しかし

（きつと人違いだ）

と、さっきの声を無視する。その間にもなんども呼んでいた。

（ケンちゃんとやら、早く返事をしろ）

「・・・」

そんなことを考えてるうちに、声がやんだ。・・・ん？朝にもこんなことがあった気が・・・

「呼んでるのが聞こえんのかー！」

その声を聞き、2つめのかたまりに振り返る。そこには・・・

右手を真つ 赤に光らせて俺を睨んでいる河野 鳴海の姿があった。

俺は、その姿に恐怖した。

「な、鳴海。落ち付こう。な?。」

しかし、その願いが聞き入れられることは、なかった。

「燃え上がれ!!」

その鳴海の声とともに、赤く光る鳴海の手から、炎が飛んで来た。

その炎は、テニスボールほどの大きさで、結構な速さで迫ってくる。
そして・・・

ブウオオオオオオオ

危機一髪。俺は、とっさに反応し顔スレスレで避けた。

クラスメイトは・・・2（前書き）

遅れてすいません。（言い訳は、あとがきで）

クラスメイトは・・・2

『・・・・・・・・』

教室が、沈黙に包まれた。

きつとこの暴力的な鳴海を見て恐怖したのだと思った。しかし・・・

『きゃあああ、河野さんステキー！！』（主に女子の歓声）

『か、かつこいい・・・』（主に男子の雄叫び）

おかしいのは俺だけなのかああああ！！？？

だって、ええ？！。あの暴力女のどこがいいんだ！！

と、心の中で雄叫びを上げながら鳴海をみた。

「ケンちゃん♪。」

うん、今まで見たことないくらい美しく怖い笑顔で俺を睨んでた♪。

「な、鳴海、危ないじゃないか！！。あたったらどうする！！？？」

「

「平気よ、当たっても死なないジャン♪。今までも、これからも。」

「今、とてつもなく危ないこと言ったよ！！わかってる！！。ていう

か、これからもって。」

「大丈夫、ケンちゃんが私を怒らせたりしない限り抑えるから。」

「なにそれ、まるで普段から殴りたいのよ発言！！。」

「まだ、口答えするの？」

「ゴメンナサイ、モウクチゴタエシマセン。」

いいたいよ！！いろいろ理不尽なことありすぎだろ！！でも、自分の命には、変えられない（悪魔の力で寿命が来るまで死ねないけど）。

「ならよろしい。」

ああ、なんでこいつの笑顔は、こんなに怖いんだろう。こんな具合に話をしていると、教室の前の扉が開き、そこからまだ、10才ぐらいの、黒髪にジャージ姿の、女の子が入ってきた。そして最前列に一つだけある机の上に片手を置いた。悪い予感がする。まさかそんなはずない。

しかし、その悪い予感は、見事に的中した。

「席につけ。」

女の子が言った。しかし、みんな動かない

「席につけ!。」

今度は、少し強めに言った。しかし、存在すら認識されていない。可哀想に・・・。

目の前の女の子は、突然肩を震わせた
次あたりキレるのでは?と思った。しかし、結果は俺の予想を遥かに超えていた

クラスメイトは・・・2（後書き）

ちよつとした行事で、広島の慰霊式に参加しました。おまけに、発表の準備もあるのでまたおくれるかもしれません。

すべての真相？（前書き）

遅くなりました。誠に申し訳ありません。

すべての真相？

「ふえええええ。」

なつ、なにiiiiiiiiiii!。

「聞いてっ・・・よ・・・ぐすっ。」

なんと、あろうことが泣き出してしまったのだ。これにはクラス中の者が、目の前の現実から目をそむけることを不可能にした。そしてみな、この状況をどうにかしようとひそひそとはなしはじめる

(な、泣いちまったぞ)

(どうする?)

(・・・かわいい・・・)

(私たちのせい)

(だよね)

(・・・。。。いい)

・・・おい、数人危ない人がいますよ(おもに一部の危ない趣味の人)

そんなふうにはなしていると、

「あ、あの。どうしたのお譲ちゃん。」

いかにも『委員長』という少女(繊細に言えば、ピンクの髪に黒い瞳身長は155cmくらいの美少女)が、女の子に話しかけた。勇者だな。

「。。。。」

あつ、女の子の表情が・・・

「ど、どうしたの」

女の子に話しかけた少女(仮に委員長と呼ぼう)委員長は、自分が

言ったことに予想外の反応を見せた女の子に戸惑っている。

おそらく俺の立てた仮説は間違いない、だとすると委員長がしたことは……

「私は、私は、」

しばしの沈黙………

「皆さんの担任ですう!!!!!!!!!!!!!!。」

………あつ、

先生が困惑し出した………

………えっ？ちよつと、

沈黙長くない………

………

………

………なんか話ずれええ………

………

………

………

………

………

………

………

『エエエエエエエエエエエエ@♂ ■ §………

「遅えよ!!!!!!。」………

おかしいだろ！あの沈黙は、何？そしてなぜ息ぴったりなんだああああ？!。

俺はどうやらとんでもないクラスに来たようだ………

すべての真相？（後書き）

すみません。しばらく体調が悪かったため、パソコンを没収されてしまい、投稿出来ませんでした。なんとか友人に携帯を貸してもらい投稿出来ました。また遅くなると思いますが、未長く付き合ってもらえると嬉しいです。

感想・評価

お待ちしております。

戻らない日々（前書き）

今回は少し主人公の過去について書きました。
一生懸命書いたのでどうぞお楽しみください。

戻らない日々

「『あまり無理しないで。』」

白い部屋の中、その部屋にあるベットのの上に彼女はいた。さっきまで静かにリンゴの皮を剥く俺を見ていた彼女が微笑みながら、ふと聞いてきたのだ。

俺は、彼女の微笑みがとても好きだ。微笑んだ瞬間の彼女の顔は、子供のような無邪気な顔でもあり、またそのなかにも、大人の女性をイメージさせる秘められた美があった。おそらく俺は、彼女のそんな笑顔に惚れたのだと思う、いや思うじゃないな、完全に惚れたんだ。今では、彼女の動きひとつひとつが、たまらなくいとおしいしかし、今の彼女の微笑みは、底しれぬ不安に駆られたような、とても弱々しい笑顔だった。

「急にどうしたんだレイラ。」

そんなレイラに、俺は軽く微笑み返してやると、冗談をいうようにそう聞いた。

するとレイラは、さっきまでの微笑みでわなく、俺の身を案じるかのようにいった。

「なんか、『が、どこか遠くに行ってしまう気がして。』」

「馬鹿だなあ、そんなわけないだろう。」

「でも!。」

そのあと何度もレイラは、引き下がらず、「でも……。」と続けた。

だんだん面倒になってきた俺は、右の拳を小指だけ立ててレイラに突き出した。

そして、できるだけ優しく

「ほれ。」

レイラは、???という顔をした。そこで俺は、恥ずかしさをグッと

抑え言葉を続けた。

「俺はレイラとずっと一緒にいる、そしてお前の体も元に戻して、きつと、きつと、お前を幸せにする……だから……ゆびきりだ。」

俺の顔は、これ以上内くらい真っ赤だったと思う。対してレイラは、しばらく呆然としていたが、突然

「ふふつ。」

と、笑い出したのだ。

「な、な、何で笑う。」

これ以上ないくらい赤くなっていた俺の顔はさらに赤くなり、もう蒸気が出るのではないかと思った。

「だって、ふふ、悪魔がゆびきりって、いまどき人間でもやらないわ。」

「そんなに……いやか……。」

俺は、捨てられた子猫のような気分だった。でも彼女は

「でも、あなた一人にすると心配だから、やってあげてもいいわ。」

「偉そうだな。」

「あら、そんなこと言うと、やってあげないわよ。」

「いえ、ぜひともお願いしますレイラ様。」

そして俺たちは、ゆびきりをした。

俺はズルイ……………

．．．守れないとわかっていたのに．．．．．

．．．もう後戻りはできないと．．．．．

．．．わかっていたハズなのに．．．

．．．だって俺は．．．

．．．俺の手は．．．

[illegible][illegible]

•
•
•
•
•

戻らない日々（後書き）

今回は、少しシリアスになってしまいました。

本編にある『

』は、これからの物語で出て来る主

人公の・・・・・・

というのは、これからのお楽しみです。

自己紹介（前書き）

遅れました。すみません。

自己紹介

・・・まるで何かに引きずられるような感覚に襲われた。・・・

「ふあああ。」

周りを見わたし、それが眠りから覚めた感覚だと気づく。どうやら俺は寝てしまったらしい。なんだかとても懐かしくて、暖かくて、とても大切な夢を見ていた気がする。まあ思い出せないが。

そしてもう一度周りを見る。どうやらホームルームが終わり一時間目の授業で自己紹介をしているらしい。今は丁度鳴海の自己紹介が終わったところだ。

「次の人は、えーと・・・ルベート君お願いしますう。」

あつ今の声は俺らの担任『飯嶋 コトミ』（いいじま ことみ）だ。でも何度見ても子供にしか見えない。こんなこと言ったら怒られるだろうか？。いや、泣き出すと思う。

そんなことより、今の名前どこかで聞いたな。

「みななもの！よく聞け！僕はルベート・ラル・シン。あの有名な英雄ルベート・ラル・ハールの子孫にあたる。思う存分称えるがいー！！。」

思い出した。あいつはハールの子孫か。・・・全然似てないな。

ルベート・ラル・ハーンは、200年前に起こったマジックボムをその手で押さえ込み世界を救った大英雄である。

マジックボムとは、いわゆるマジックアイテムの暴走だ。下手をすれば世界を破滅させる力を持ったまさに爆弾。

ルベート・ラル・ハーンは、それに立ち向かい、唯一帰って来た英雄。

でも実際の所は悪魔と契約しマジックボムを消滅させただけ。まあ

代償は大きかったが・・・。

何でこんなことを知ってるかって？そりゃあ、ねえ。だって契約したの俺だから！！。

意外と簡単だった。まあ俺の魔力を使えばあんなもの。

それはいいとして、ホントに似てないな。顔は別にしても性格が正反対。ハーンはもっと礼儀正しかったのに・・・。

そんな事を考えてるうちに俺の番が来たようだ。

先生に呼ばれ立ち上がる。できるだけ目立たないように

「俺は、浅野 健一。これからここでお世話になります。たくさん友達を作たいので、ドンドン話しかけたり質問したりしてください。」

完璧だ！。さり気なく嫌な印象を与えない完璧な挨拶。昨日一晩中考えた自己紹介、これで目立たない事間違いないと思うのだが1つだけ弱点がある。

「あゝ質問。」

ちよつと怖い顔の男子生徒が立ち上がった。

「はい。」

これがこの自己紹介の弱点、この自己紹介は質問されるのだ。まあ、どんな質問にも見事に答えようでわないか。ワッハッハ。

俺には、自信があつた。どんな質問にも、自然に答える自信が。

でも、そんな俺の考えがあまかつた・・・。

「おまえ、河野 鳴海さんとはどんな関係だ。」

俺の思考は、凍り付いた。

俺には、普通の日々は当分きそうにないらしい・・・。

自己紹介（後書き）

まだ新しい機能がよくわかりません。

俺の夢（前書き）

すいません・・・。

俺の夢

まずい。非常おおおおおおおおおおおにまずい。

まさかこんな、こんな

『浅野 鳴海さんとはどんな関係ですか』

さっきの質問が頭のなかを木霊する。

まずいぞ。この質問は、一歩間違えれば俺の『目立たないで幸せ毎日ジミジミライフ』が崩壊しかねない。・・・ちなみにどうよ俺のネーミングセンス、天才的だろう。これを、これを鳴海は、

『あんたのネーミングセンスはもう手遅れよ』

と言いおった！！。彼女には分らないのだ。はあ、自分の才能が恐ろしい。

と、こんな俺のネーミングセンスに思考を傾けていると、いつの間にか皆の視線が俺に集まっていた。くっ俺としたことが油断した。

それでだ。ホントにどうする。それはさ、普通ならここで『幼馴染』といって解決するかもしれないが今の状況はちよいと違う。『幼馴染』が『鳴海』なのだ。暴力ふるう言葉使いは悪いわ、でももてる！！。なぜかもてる。そんなやつと幼馴染と分かれれば俺の『目立たないで幸せ毎日ジミジミライフ』がめちゃくちゃに、ああ、ああ、ああああ！！！俺は、俺はどうすればいいのだ。

「幼馴染よ。」

.....あれ？

.....

A 20x20 grid of dots forming a square shape. The dots are arranged in a regular pattern, with 20 dots in each row and 20 dots in each column, creating a total of 400 dots. The dots are black and the background is white.

「ぐおらあああああああああ、 なっ なっ 何してくれんじや
あああああああああなあああるううううううううううう
ううみいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
うるさい!!」ぐわっは!!。」

あまりのことに、俺の頭が拒絶反応を起こしてしまった。今何が起
こったかわからなかった人に簡単に説明しよう。

俺が迷ってた

• • •

・
鳴海があっさり言った

・
・
・
・
俺の頭が拒絶

・
・
俺が絶叫
とともに鳴海の蹴りが炸裂

・
・
・
・
(10分後)

今にいたる

「鳴海さんの幼馴染ってホント!。」

「浅野君、ぼくと友達に。」

「新聞部です。ぜひお話を。」

カムバーク『目立たないで幸せ毎日ジミジミライフ』マイドリーム
!!!!!!!!!!。

俺の夢（後書き）

テストがヤバイです。300超えないです。迷惑かけます。

というわけで皆さんに

『誘拐された俺』の章

とか章の候補を出してほしいのです。暇なら感想と一緒にお力添えをお願いします。（100%無理じゃなければできるだけ実行します。）

『俺が契約!!』の章〓遭遇〓（前書き）

『俺が契約!!』の章はじまりました。

『俺が契約!!』の章へ遭遇へ

「やったああ!。」

俺は誰もいない道の下真中で雄たけびをあげた。俺はやっとあの質問攻めから抜け出せたのだ。雄叫びをあげるなど言う方が無理だ。

「今日はこれ以上問題に巻き込まれないように早く帰ろう。」

今は鳴海もいない、安全に帰るなら今がチャンスだ。

そんなことを考えているときだった。

『*****』

「!!!。」

俺は、ある気配を感じた。黒くて、ドロドロしていて……そして近くに人間の気配。

間違いない、『あれ』の気配だ……。

見つけた。

俺の目の前には、2人の男女がいる。でもこれは、2『人』と言っているのだろうか。なぜならその内の男の方には、『コウモリのよな羽』があったからだ。そしてその男が、女を、と言っても俺はその女、いや、少女に見覚えがあった。ピンクの髪に黒い瞳身長は155cmくらいの美少女。そう、『委員長』

だ。その委員長を男がズタボロにしている。片腕はスジから先がなく、片目は潰れ、美しかったピンク色の髪は、紅い血で染められている。はつきり言っただけのことこの上ない。他にもさまざまな傷があったが、これ以上考えると本格的に吐きそうなのであとは皆さんの想像にお任せしますよ。

「いや、お嬢さん不幸だったね、俺と会うことがなければ、明日からも幸せに暮らせたのに。」

ホントにそうだな。

俺は、そんなことを話す男と、委員長を『ジツと見つめているだけ』。いや、まず何で俺はここにいる、『はじめから助ける気なんてないくせに』俺はここにいる。俺は自分がわからない。

毎回そうだ。駆けつけるだけ駆けつけて、餌食になった人間が食われるのを見ているだけ。今回もそう、『偶然知っている人間だった』それだけで状況も俺の行動も変わらない。

「や……だあ……」

突然、さっきまで身動き一つしなかった委員長が声を出した。

「生……っ……きるの!。」

「ああ?。」

「死ぬも……んか……私は……っ……い……い……
。」

「なんだてめえ。聞こえねえよ。」

「わたしは……生きるのおっ……。」
『生きたいよ』

それは、弱々しい声だった。でも、それでも、力強い声だった。

『俺が契約!!』の章〳〵遭遇〳〵(後書き)

次回に期待してください。(今日か明日には、書けると思います)
感想・ご意見待ってます。

『俺が契約!!』の章〰契約〰（前書き）

結構早かった♪。

『俺が契約!!』の章〜契約〜

く????

私、死ぬのかな。

そんなことを考える。今日はいつもと違う道で帰ることにした、今
思えばそんなこと考えた自分が馬鹿みたい、いつも通りに帰れば、
こんな魔法が利かないような『鬼』に会うこともなかったのに、こ
れじゃあ何のための『ナイツ』かわかりやしない。

勝つ自信はあった。ナイツのなかでも3番目に強い私なら、この
見たこともない鬼にも勝てると思っていた。

しかし、実際は違った。私の攻撃は一撃も当たらず、私が持つ最高
の技『ウォール』も効かなかった。そして私は瞬く間にボロボロに
された。おそらくもう助からない。そう思うと私は胸の奥から湧き
出る感情があった。

「生……っ……きるの!。」

感情を口に出す。でもうまく言えない。

「ああ?。」

鬼が不機嫌そうに私を見る。

「死ぬも・・・んか・・・私は・・・っ・・・い・・・い・・・」

さつきよりも感情が高ぶっているのが分かる。この時の私には『生きたい』という感情しかなかった。ただ生きたいと。

「なんだてめえ。聞こえねえよ。」

たとえ

「わたしは・・・生きるのおっ・・・。」

悪魔にこの魂を売ろうとも・・・。

く健一く

「わたしは・・・生きるのおっ・・・。」
『生きたいよ』。『』

その声が、昔聞いた声と重なる。しかし、それよりも、俺の心は、勝てないとわかっていながら、まだあの悪魔に立ち向かう委員長の強さに目を奪われていた。そして……

「ふ、ふはははははは。」

から笑い

気に入った。

だから、力を貸してやる。

俺は自分に『悪魔の鎧』を着ける。足から少しづつ俺の体を張っていき俺の体を完全に覆うと、ブクブクと動く。そして黒い西洋の鎧へと変わる。これで俺だとはわからない。さあて、面倒だが『契約』しますか。

くくくくく

もう終わった。そう思った。でも、諦め切れない自分がある。生きたい、生きたい、生きたい……。

『生きたいか?』

どこからか声が聞こえる。なんか変な声だ、すごいガラガラ声。

『お前は、生きたいか？』

また聞いて来る。生きたいに決まっている。

『なら、力をかそう』

力を貸す？そんなことできるの？

『できるさ。おまえ次第だがね』

わたし次第？

『そうだ、おまえが俺のマスターになればいい』

あなたは・・・だれ？

『俺は・・・・・・・・悪魔だ』

悪魔、彼は自分を悪魔と言った。ていうことは、本当に魂取られちゃうのかな。
ちよつと冗談っぽく考えてみる。

『そんなことはない』

えっ？じゃあ

『そのかわり』

完全にリスクがない訳じゃないらしい。でも当たり前か。
私は彼のつぎの言葉を待った。意外と緊張する。

『俺との契約は俺からしか切れない』

「へ？」

あまりにも予想外の答えについ声が出てしまった。

『でっ、契約するかしないか、早く決めないと・・・』

目の前の鬼が迫ってくる。つぎこそ止めを刺すつもりだ。
私に考える時間はなかった。

契約する。

『そうか、ではこれより儀式を始める。なんじ』

彼が何かつぶやき始めた。

『なんじこれより我はなんじを主と認めいかなる願いも叶えること
を誓う。』

そして一泊おき

『なんじの真の名を示せ』

私はジッとしている、じゃましたら悪いし。

『なんじの真の名を示せ！！』

えっ？なに？私に言ってる？

『そつだよ！早くお前の名前を口に出していえ』

怒鳴られた。でも仕方ないので、残り少ない体力で言葉を発する。

「私の名前は……日柄崎 美琴。」

『契約成立』

その声が聞こえた瞬間眩しい光で私は目を瞑ってしまった。

『俺が契約!!』の章〓契約〓（後書き）

きたあああ!!。

ここまできたああああ。

ここから本番です。好ご期待。

感想・ご意見お待ちしています。

『俺が契約!!』の章〽契約〽2（前書き）

遅れました。

『俺が契約!!』の章〜契約〜2

『契約成立』

俺と委員長、いやもうマスターか、の契約は成立した。しかし、はつきり言ってこの契約は俺にとっては、マスターを助けられる以外マイナスでしかない。

それは、普通の悪魔なら、マスターと魔力を共有することができ、なおかつ願いを叶える代償をもらえるのだが、俺のような悪魔落ちは、願いを叶える代償どころか、魔力の共有もできない、おまけにマスターの願いは絶対だときたら自分の寿命を縮める行為以外の何者でもない。えっ？そんなことをなぜ俺がしたか？このマスターを生かしたいと思ったのもそうだが、おそらくは『罪償い』のつもりなのだろうな。そんな自分がとても醜く見える、ああ、反吐が出そう……。

まあ、そんなことは置いといて。
そろそろかな。

目の前の光が消えていく。そこには俺のマスターが居た、しかしさつきとはまったく違う。消えうせていたはずの腕や目は元にもどり、髪もはじめの美しいピンク色を取り戻している。まったくの無傷。これが俺たち悪魔の力。『代償』次第で『殺す』という願い以外ならどんな願いも叶えられてしまう。だが、『殺せない』わけじゃない。これは神達の気まぐれ。悪魔たちがその手で人間や『悪魔』を殺す様をみて楽しむゲーム。

まあそんなわけでマスターの最初の願い『生きたい』という願いは

叶えた。

「な、なんで?!。」

マスターは自分の体を確かめるようにさする。

「体の調子はどうですか?マスター。」

「マスター?.....!!あなたもしかして、さっきの.....悪魔?」

おお、理解が早いね

「はい。」

「なんだてめえ!!」

さっきから無視している悪魔がほざいている。
うるさいな.....。

「返事しろコノヤロウ!! エレキテル!」

彼は俺にむかい、エレキテルを撃ってきた。雷のように空気を切り裂きながら俺に向って。
そして……。

『ドゴオオオオオンンンン！！！！』

「きゃあっ！」

マスターが悲鳴をあげた。

『俺が契約!!』の章へ契約へ2（後書き）

感想・ご意見待ってます。

『俺が契約!!』の章〽契約〽3（前書き）

残酷な表現があります。

『俺が契約!!』の章〜契約〜3

〜美琴〜

今度こそ終わったと思った。しかし衝撃はこない。私は、恐る恐る目を開けた。煙で前は見えない。

徐々に煙が晴れ、私はようやく今の状況を理解した。それと同時に私は目を見開いた。

・・・消えていた。

それ以外に表現のしようがなかった。彼の攻撃はもじどおり跡形もなく。目の前の彼は身動き一つしていない。対して鬼の方は・・・

「あ、ああ。」

放心状態だった。何が起ったか理解できない、そんな顔だ。おそらく私も同じ表情をしているのだろう。そのとき、目の前の彼がやつと口を開いた。

「マスター、願いを。」

願い？何のことだろうか？

「マスター、願いを。」

願いをいえということだろうか？

「あの、えっと、願いって。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばしの沈黙・・・・・・・・そして

「・・・ああ！もうめんどくせえ！」

怒鳴られた。

おそらく猫をかぶっていたようです。おまけに短気な性格。

「おまえは、こいつを倒したくないのか。」

「倒したいです。」

「なら願え。あいつを倒せと。」

彼は私をまっすぐ見つめる。

やっと理解した、なぜ私が無傷なのか、それは、それが私の願いだったから。そして彼は私の願いをなんでも叶えると言っているのだ。彼は何も取らないと言った、でもそれは本当だろうか。もしかしたら願いを叶えたあとにそのまま・・・・・・・・考えてみようがない、願うだけ願おう。

「あいつを・・・・・・・・あの鬼を・・・・・・・・倒して。」

く健く

「あいつを・・・・・・・・あの鬼を・・・・・・・・たおして。」

「鬼？」

鬼？あの悪魔のことか。

しかし、なぜ彼女はそんな言葉を。見た目で考えれば悪魔というのが一番しっくりくると思うのだが。

まあいいか。彼女がそういうなら鬼ということにしよう。

「オーケーマスター。」

俺は振り返る、目の前の悪魔を抹殺するために。

「お、お前。悪魔落ちだな。は、はは、あ、あ、悪魔落ちごときが俺にかなうとも思っただのか。」

相手は俺が悪魔落ちだと解ったらしい。さっきよりも余裕が見える。俺は右足を軽く出し、そして………ザシュッ

「あっ？」

間抜けな声が出る。何が起きたかわからない、そんな声だ。

彼が気づいた時には、俺の手は彼の心臓を鷲づかみにしていた。そして徐々にちからをいれていく。

「な、そんな！やめろ！！グハ、ウエエ、やめろおおおお！！。」

彼は血を吐きながらもがいている。でもそんなの聞くわけがない。なぜなら、マスターの願いは絶対だからだ。さらに力を加え、そしてついに

グチャッ

俺はゆっくり手を引き抜く。彼は力なく倒れた。もうピクリともしない。当たり前か、心臓つぶせばどんな生き物でも死ぬわな。

そして彼は黒い光とともに消えていく。しかしその前にやることもある。ああ向けに倒れている彼を蹴飛ばして背中を向けさせる。そして彼の羽を掴み力いっぱい引く。血管が切れる音した、まるで噴水のように血が吹き出る。そんなこと気にもとめない。

彼は完全に消えた。残っているのは彼から引きちぎった羽だけ。俺はその羽に魔法をかけ小さくしていく、このままでもいいのだが、気持ち悪いので嫌だ。

そして黒いビー玉ぐらいの大きさになった。そしてその玉を口に含み・・・・・・・・飲み込んだ。

く美琴く

私は今動けないでいる。恐怖で動けないでいる。

私は、願いを言ったあと大事なことを思い出した。

あの鬼が、とてつもなく強いということに。私でさえも適わないほど強いことに。

しかし、そんな心配ははじめから必要なかった。

・・・・・・・・・・圧倒的だった。

正直適うなんて思わなかった。それを、いとも簡単に・・・・・・・・。

その強さに恐怖した。そして彼は、あの鬼を『食べた』のだ。

その後に私に振り向き、ゆっくり近づいて来る。

「やめて！食べないで。」

私は反射的に目を瞑った。

『俺が契約!!』の章〓契約〓3(後書き)

感想・ご意見お待ちしています。

『俺が契約!!』の章〜契約〜4（前書き）

『俺が契約!!』の章〜契約〜ラストです。

『俺が契約!!』の章〜契約〜4

来るべき衝撃はやってこない。そのかわり

「食わないって。」

なんかテレビの被害者みたいな声で話しかけられた。あのモザイクみたいな声で。
そして彼は私の頭に手を置き

「怖かったな。」

優しく撫でてくれた、つい赤くなってしまう。

「なんで、食べないの。」

つい気になって聞いてしまった。すると彼はため息を尽き

「そんなに食われたい。」

と聞いてきた。もしかして地雷を踏んだんじゃ。

「ごめんなさい。」

「必要ないの。」

「え?」

彼の言った意味がわからなかった。必要ない?なんで?

「さっき、あいつ食ったの見てたろ。」

「はい・・・。」

やっぱり食べてたんだ・・・

「俺はあいつみたいのを食えば自分の寿命は確保できるんだ。」

「寿命？」

私には彼の言っていることがわからない。寿命？確保？
そんな私の様子に気がついたのか、彼はめんどくさそうに説明し始めた。

「何で悪魔が願いをかなえた人間の魂を食つか知ってるか。」

「・・・知らない。」

知るわけない。ていうか、取るんじゃないかって食べてるんだ。

「そうか。じゃあそこから説明するか。」

そして彼は話し始めた。悪魔と契約すると魔力が共有されること、
願いをかなえる代わりに代償を取られることも。

「なるほど。」

・・・

「てっ！それじゃ私も代償取られるってことじゃないですか！」

「そうだ！なんか流れに任せて返事したけど、私このまま代償を取られちゃう。」

「安心しろ。俺は何も取れない。」

彼はあきれた様に言う。

「取れない？どうして？」

「そうだ。なぜ彼は取れないのだろうか。」

「俺は『悪魔落ち』なんだ。」

『悪魔落ち』何だろうか。言葉から考えると、悪魔から落とされたという意味。

「そのままの意味だ。俺のような悪魔落ちは人と契約できても、魔力の共有や代償の受け取りはできない。」

「なるほど。今度こそわかりました。」

彼の説明でやっと私は自分が生き残れたことを実感した。でも気になることがある

「ねえ、なんであなたは悪魔落ちになったの。」

「……………」

「言いたくないならいいの、ちょっと気になったただけだから。」

「すみません。マスター。」

どうやら聞いてはいけない事らしい。彼は、本当にすまなそうにしている。

はじめは怖かったが、鎧の間から時々見える彼の目はとても優しくうだ。そのとき私は彼の名前を聞いていなかったことに気づく。

「ねえ。」

「なんだ。」

「あなた、名前は。」

「名前は……ない。」

「ないの。」

「マスターが付けてくれ。」

「私でいいの。」

どうやら彼には名前がないらしい。そして付けてほしいらしい。とても迷う、どんな名前にしようか。

.....

「健一」

不覚だった。まさか名前を聞かれるなんて。ここで浅野健一と答えるほど俺も馬鹿じゃない。そこで名前を付けてもらうことにした。俺ってば天才………と思ったのだが。どうやら選択を間違えたらしい。

「アツ君うん？」

「そう、アツ君。悪魔のあでアツ君。」

「でも、その、あれ。」

「マスターの命令よ。」

ぐっ。すっかりマスターという立場になれたようだ。仕方ない。

「オーケーマスター。」

「よろしい。あと……。」

まだあるんかい！これ以上何をしろと。あんな、あんな変な名前まで付けられて。

「マスターていうのやめない。」

「え？」

「だから。」

「いや、わかった。じゃあなんて呼べばいい。」

「えっと……美琴？」

「『美琴？』じゃねえだろ！！さっさと決めろ！！帰れねえだろ！！」

そつだもつ8時をまわっている。そろそろ帰りたい。

「ええ！帰っちゃうの。」

「呼べばくるから。」

「ならいいや。アツ君って呼べばいいの。」

「そう。」

そんなことどうでもいいだろ！今は呼び方！！ってそれもどうでもいいけど

「じゃあ美琴でいい。」

そして俺はやつと帰ることができた。
晩飯食えなかったけど。

『俺が契約!!』の章〽契約〽4（後書き）

サブタイトル募集中。

『ナイツ?新しい生活』の章(前書き)

かなり短いです。

『ナイツ？新しい生活』の章

びびびびびび．．．

どこかで聞いたシチュエーション。このあとオヤジの声が．．．

『起きんか馬鹿もん！！』

ふふふ、同じ手はくわんわ。

そして俺はまた眠りに．．．つこうとした。

『健一．．．あなたがこのメッセージを聞いているということは、もう、お父さんの声も忘れ、その声に反応することもできなくなつたということですね．．．。母さんは悲しいです。お父さんの声を忘れるなんて、母さん．．．母さん．．．あなたをそんな子に』

「まっただああ！！」

俺は部屋の隅に置いておいた目覚し時計にダイビングした。

「なにこれ！お袋の悲劇講座始まるよこのままじゃ！オヤジの怒鳴り声よりたちわりいよ！！」

拷問かと思った。おそらくこれはオヤジの策略。

くそお。あの馬鹿オヤジめ。

．．．．．そんなことを考えてもしょうがない。
これからはちゃんと起きようと誓った俺だった。

「今日は魔力測定と模擬戦を行います。」

．．．．．

「はあ。」『おおおおおお』

さいですか．．．。

今の溜め息はもちろん俺である。（ちなみに雄たけびは男子．．．．と鳴海）

やはりこれがあった。俺が一番嫌いな行事。毎年毎年わざと負ける

人間の身にもなってみろ。

疲れるだけだから。

まあそんなこと言っても時間は待ってくれない。あつという間に魔力測定……てか早くね！？雄たけびから2分しかたつてないし。

「みなさあん、適当に並んでくださあい。」

わがクラスの、小学生せん（ギロリ）……担任の先生ことコトミ先生の間抜けな声が聞こえる。

なぜ俺が震えているかって、何ででしょう……。

「それでは皆さん覗いたらだめですからね。」

ひとりの検査が始まったようだ。

検査後

俺の検査も無事終わった。検査と言っても、変な水晶に手をつけるだけ。後は勝手にレベルを導き出してくれる。ちなみに俺くらいの歳の平均はレベル12つてところだ。もちろん俺の魔力がそれで納まるわけがないが、それはあくまで悪魔の状態のときだけ……ダジャレじゃないからね。

まあそれでも俺の魔力レベルは24。かなり高いほうだ。しかしさつき俺が調べたところ、このクラスにはレベル30越えの人間が5人居る。

まず河野鳴海。

そう俺の幼馴染。

2人目は、ルベート・ラル・シン。
……ナルシストだ。

3人目は、日柄崎 美琴。

俺のマスターだ。

4人目は、あのイケメン野郎。

確か名前は本堂 幸助。ほんだごうしすけ

5人目は・・・・・・名前は知らんが自分を俺と言う少女だ。

な感じでこのクラスには化け物が5人も居るわけだ・・・・・・俺もそうか・・・・。

「それじゃあ健一君、シン君、準備はいいですか。」

おっと、そういえば試合するんだった。適当に遊んで負けるか。

『ナイツ?新しい生活』の章(後書き)

次回戦闘はあります。

『ナイツ?新しい生活』の章2(前書き)

うまく書けたかな?

『ナイツ？新しい生活』の章2

すでに試合ははじまっている

「やあ、君はとても運がいい、なにせこの僕と戦えるのだからな！」
「……うわあ、ナルシストいきなり全開ですか……」

「なにか言いたまえ。」

めんどくさいやつだな、早く始めろよ

「はあ、これだから市民は、少しは僕を見習えばいい物を。」

お前から何を見習えと言っのたろうか？もしかして自信をもてと遠まわしに言っているのたろうか。

「まあ、君の遺伝子じゃ、僕のカリスマ性に適うはずもないけどね。」

どうやら勘違いだったらしい。彼は自分を自慢したかっただけのようだ。

でもさすがに飽きてきた。少し挑発して見るか。

「おい、ナルシスト。さっさと初めてくれませんか。」

何気なく言ってみる。しかし、今俺は、シンのことをナルシストと呼んだ気がする。

気のせい

「この無礼者！！。ぼ、僕がナルシストだと！！。」

ではないようだ。怒ってる怒ってる。そろそろ来るかな。

「今の言葉、存分に後悔させてやる！！。」

どこかの悪役が言うような台詞を吐き、ナルシストは俺に左足で回し蹴りを繰り出した。

様子見のつもりだろう。思ったよりも早い。

「くらえ！」

俺は右手でその足を左に受け流す。しかし

「まだまだ！」

そのまま受け流せるはずもなく、なんとナルシストはその受け流し

た左足とは反対の足を地面につけ軸にして回転、俺は1度距離をとる。

しかしそれがいけなかった。

「『アイスレース』。」

俺はうかつだった。こいつの得意魔法は『アイス』。さっきの回転は俺に距離をおかせ、その距離を利用し、巨大なアイスレースを作るための誘導だったのだ。

さすがハーンの子孫だけあるな、正直甘く見ていた。

「今の気分はどうだ。」

俺はナルシストのアイスレースで体の半分を氷ずけにされている。

「最悪です。」

「これからは言葉遣いに・・・」

ジュウウウウ・・・

氷が溶けていく。俺の『ヒヤヤーボディ』（俺が考えた）で溶かしているのだ。この魔法は自分の体温を200度まで上げられる（悪魔化すればもっとあげられる）技である。

「やるね。まさか僕のアイスレースを破るとは、君が二人めだよ。」

ちなみにこいつは一度鳴海にボコボコされたらしい。

「でもこれで終わりだよ。」

ナルシストは変な構えをとり

「『氷の槍』」

そう唱えるとともに、無数の槍が現れる。

痛そうだな、もうそろそろ負けてもいいだろうか？

はつきり言ってしまうばこんな攻撃痛くも痒くもない。おそらくナルシストもまだ本気を出していない。このままいい気分が終わらせてやることにした。

決定！

俺はゆっくり右手を上げる

「今更何をするつもりだい。」

ナルシストも多少は警戒している。

そして右手を上げきり。

「参りました。」

氷の槍の代わりにみんなの冷たい視線が突き刺さりました。

『ナイツ?新しい生活』の章2(後書き)

サブタイトルル募集中♪

感想・御意見お待ちしています。

『ナイツ?新しい生活』の章3(前書き)

ちょっと読みづらいかも・・・。

『ナイツ？新しい生活』の章3

く鳴海く

「ホントにあんたには恥とかないわけ。」

私は今とても怒っている。なぜかというと

「ないね。まったく持ってない。命の方が大事。」

この私の幼馴染。

ケンちゃんは今日の模擬戦で、降参をした。別にそれはいい、私が許せないのは、毎年毎年本気も出さずにわざと負ける。私はそれが許せない。

でも今日は流石にやりすぎた。

フレ임なんて普通人につかわない技でおしおきしたが

「鳴海！イタイ！そんな風に扱うな。」

こいつをひきず……じゃなくて家まで送る羽目になった。
隣の家だけど

「着いたよ。」

「おつ。サンキュウ。」

ケンちゃんは私の頭に手を置き撫でる。

「やめろって!。」

私はその手を払う。

小さいころからいつもそうだ、癖なのかいつもこんな風に頭を撫でる。いやってわけじゃないけど・・・

「じゃあな。」

ケンちゃんはいつの間にか部屋に入っていた。

「あつ。」

今日のことを謝るのを忘れていた。

私はケンちゃんを呼び止めようとした。しかし・・・

『ピーーーーー』

そのとき、『指令が来た』。

今回の指令は、学園に出た鬼集団の撃退だった。しかも今回の鬼のなかには魔法が効かない鬼が居るらしいらしい。いったいどんな鬼だろう。

今回のチームはいつもの3人だった。私の親友日柄崎 美琴。ナルシストのシンそれと私。

『もたもたしないで早くいけ』

通信機の向こうで首領が怒っている。早く行かないとまた怒鳴られ

てしまう。それをよく解っている私達は、急いで学園に向かった。

すごい数だった。ざっと30体はいいたね。でも、報告どおり、魔法が効かない鬼がいた。まるでコウモリのような羽。鬼というより悪魔だった。

「アイススレーズ！」

シンが氷の魔法をかける、しかし

「ふん、何をしている。」

攻撃は消滅。氷はまるで鬼をよけるようにできている。

「そんな！僕の攻撃が。」

シンはさっきからいろんな技を出している。時々難易度の高い魔法も使っている。それでもだめだった。私も手伝ってあげたいけど、今は美琴治療がある。

く美琴く

今はすごいピンチです。シンさんと鳴海さんが食い止めていますが、一度戦った私にはわかる。あの2人でも敵わない。

私は後悔していた。魔法が効かない鬼が居ると聞いた時点でアツ君

を呼ぶんだった。

30体近く居た鬼を倒して私は油断した。気づいた時には吹き飛ばされていて今は鳴海さんに治療をつけている、痛みで動けない。喋れさえすればアツ君を呼べるのに。

あと少しで喋れるくらいまで回復しようとしていたとき

『ドゴーン!!』

何とか逃げ切っていたシンくんがついに捕まり、倒れ伏した。そして悪魔はこちらに近づいて来る。もう少し、もう少しなのに。

「ここからさきは通さないわ。」

鳴海さんは私の前に立ちふさがった。もちろんその間にも治療は続けている。

「人間ごときが、楯になろうというのか？」

この前の相手とは違う、もっと黒い気配がする。

「そうよ。人間だからってなめると怪我するよ。」

「そうか。たくましいな。」

「どうも。」

「お礼に、一撃で行かせてやる!!」

「アツ君!!」

鬼の一撃が放たれるのと私がアツ君を呼ぶのは同時だった。

『ナイツ?新しい生活』の章3(後書き)

戦闘シーンがなくてごめんなさい。次回はありますが、時間がかかるかもしれません。

『ナイツ?新しい生活』の章4(前書き)

戦闘・・・うまく書けない。

『ナイツ？新しい生活』の章4

く健一く

「疲れた・・・。」

家にかえりはじめに発した言葉はそれだった。

今日は本当に疲れた。手を抜くのもそうだが、その後鳴海に『降参ってなによ、みつともない！！』とフレイムを打ち込まれたのだ。

そのあと家まで引きずられた。いたた・・・。

おまけに今日は『と。る魔術の禁書。録』の再放送だったのに、少し遅れたじゃないか。

そつえば、今頃マスターは何しているんだろうか？。まあいいか・・・。

しかし1度気になると忘れられなくなってしまう。仕方なく俺はマスターと『共感』してみることにした。

「マスターロード・・・接続。」

はじめに見えたのは、俺、いわゆるマスターを治療している鳴海の姿だった。

いったいなにがあったんだ・・・。

それが俺のはじめの感想だった。まず、なぜ鳴海とナルシスト、そしてマスターがいっしょにいるのか（悪魔も居るし）。そしてなぜ

いきなりピンチなのか、そして……木の影に隠れる人陰。気になることだらけだ。まずなせマスターは俺を呼ばない。

「……………」

まさかこいつ『声にださないと』駄目とか思ってるんじゃない。……ありえる。あのマスター真面目だもん。

どうしようかな？ 助ける？ でもおそらく木の影に隠れる『彼女』は『エクソシスト』だ、俺が行かずとも彼女が助けるはずだ。

おっと、ナルシストが倒れたな、たぶん死なないけどだとは思う。すると鳴海が治療をしながら美琴の前に出た。やるね鳴海、それ結構魔力使うよね。でも勝てないよ、たとえ鳴海でも、『天使か悪魔の加護』を受けていないかぎり勝てるわけない。

マスターもそろそろしゃべれる程度に回復すると思うが、おそらく『俺は』間に合わない。悪魔も確実に鳴海を殺る（やる）気だ。

そして悪魔の一撃が放たれる。それと俺が呼ばれるのは、同時だった。

（鳴海）

目の前に鬼が出たときから私は死ぬことを、直感的にわかっていた。だからせめて美琴は守ろうと思った。私がこいつを止めていれば、じきに治療が終わる美琴は逃げられるはず。最期のときが近づく音が聞こえる気がする。

ああ、何でだろう。こんな時にあの幼馴染の彼のことしか考えられないなんて。こんなことなら……………って！ 何考えてるの私！！。あいつなんか！

「お礼に、一撃で行かせてやる！！」

彼の攻撃が来る合図だった。緊張のあまり瞳を閉じる。しかし、もう一つ声が聞こえた気がした、たしか『アツ君』って。誰だろう、もしかして美琴の彼氏かな？そんな話は聞いてない。

もし、もし助かったら、詳しく聞かせてもらおう。．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．あれ？

いくら待っても衝撃はこない。おそろおそろ瞳を開ける、私の目の前には、一人の『女性』がいた。とても綺麗な人。私はつい見とれてしまった。

「だれだおまえ。」

その声で私は我に帰った。

私生きてる！！。

そつ、生きている。生きているのだ。私はそれが何よりも嬉しかった。

「私は舞香、エクソシストの隼^{はや}戸^へ 舞香^{まいか}だ。」

．．．．．ハスキーな声。カッコいい。

そして彼女をよく見ると、片手に2メートル余りある日本刀を握っている。鞘は付けたままだ。

「君、可愛いね。俺と遊ばない！！」

鬼が突然舞香さんに襲い掛かった。

「危ない！」

私は突然のことについて大声を上げてしまった。

金属同士がぶつかる音がした。見ると、舞香さんが私たちが手も足も出なかった鬼の攻撃を、鞘に刀を入れたまま受け止めている。そして鬼へ蹴りを繰り返す。鬼はそれを難なくよけ、カウンターをかけた。この角度では鞘では防げない。

「もらったあ!!。」

鬼が叫ぶ、しかし次の瞬間

ジャキンッ……

いつ抜かれたかはわからなかった。いつの間にか舞香さんは悪魔を背に、刀を鞘に納めていた。血液が飛ぶ、そしてその鬼は黒い光となって消えていく。ちょうどその時だった。

「あーあ、倒しちゃった。」

うしろからいかにも怪しい声（モザイク声？）が聞こえた。振り返ると、黒い西洋の鎧で手も足も顔さえも隠している怪しい男が居た。その男はすたすたと鬼の死体に近づいていく。

「さて。」

その前に舞香さんが立ち上がり、刀を突きつけた。

「おまえ……悪魔だな。」

私はその言葉を聞き、その男から離れ美琴をかばうように両手を広げた。

「違う。」

「嘘をつくな。」

「残念ながら本当だ。」

「悪魔の言葉など信じられるわけがない。」

舞香さんはさらに刀を進める。

「待って!!」

その舞香を止めたのはとても以外な人物だった。

「その人は……アツ君は悪い人じゃありません。」

「美琴？」

それはほかならぬ私の後の美琴だった。

『ナイツ?新しい生活』の章4(後書き)

戦闘シーンはどうしても雑になります。

これから改善して行くのでこれからもよろしく願います。
感想・ご意見お待ちしております。

『ナイツ?新しい生活』の章5(前書き)

遅くなりました。

『ナイツ？新しい生活』の章5

く健一（アツ君）く

予想通り、鳥海は彼女が助けたようだ。

「鳴海！！。」

しかし、煙で完全に視界がふさがれた状況下で、そんなことがわかるのは、今この場に2人しかない。俺と、あの煙の中で鳴海を守った彼女。

「心配ない。」

このままだとマスターが飛び出して行きそうだったので、安心させるために言葉をかける。

「でも！」

はじめは落ち着かなかったマスターも、煙が晴れ、状況が見えてくると、徐々に冷静さを取り戻していった。しかし今度は逆に、目の前の状況に混乱して動けないでいる。そんなマスターに俺は、手を振り、鳴らし、突いてみた。

そんなことをしている間に、向こうの方では、戦闘が始まったようだ。でも見ていても楽しくない、なんというか……絵がない？

そんな戦闘でも、最後の一撃は少しだけ興味を持った。

鞘から出た刀は、出た瞬間から眩い光を放っていた、おそらく天使

の加護者だ、と言つてもエクソシストが悪魔の加護受けたらそれはそれで問題ありだが。

それはそうと、その刀の速さにも驚かされた。人間があれほどの速さの攻撃をするなんて、人間も進化したな……。あれ、もしかして戦闘終わったかな。

見ると悪魔は黒く光り消えていく

ああ、もったいない。

そう思つた俺は、あの悪魔を食うべく、歩みを進める。だが……

「まで。」

そう簡単には通してくれませんでした。

俺の前に立ちはだかつたのは、予想どおり舞香と名乗る（さっき聞いた）エクソシスト。

「お前……。悪魔だな。」

あの刀、刀近いよ、何気に鎧の隙間狙つてるあたりさすがだと思ふよ。

ひどい！鳴海まで引いちゃってるよ、俺ショックだなー。

「違う。」

一応いっておくが

「嘘をつくな。」

信じてもらえるはずもなく

「残念ながら本当だ。」

駄目押しで言ってみるも

「悪魔の言葉など信じられるわけがない。」

通用する分けないよねえ。

すると舞香は刀をまた進める

「待つて!!」

そのとき俺の後ろから声がかかった。

く 鳴海 く

意味がわからない。

「その人は……アツ君は悪い人じゃありません。」

美琴は確かにそういった、たしかにさっき『アツ君』と呼んだのは聞こえた。でもよりにもよってこの怪しい男が……

「何でこの男が美琴の彼氏なの!!」

私のかわいい美琴がこんな男に

「な、鳴海!! いったい何をどう勘違いしたらそうなるの!!」

違うらしい。

「じゃ、そいつ何者。」

問題はそこだ、この男が美琴にとって何か、さつき舞香さんはいいつを『悪魔』と言った。

「この人は……。」

まず悪魔とは何だろう。私が知っている悪魔は、人間の大事なものを奪っていく、悪行を働く最低の生き物だ。……もしかして、さつきの鬼も悪魔だったのではないだろうか、ならば目の前のこの男も敵なのでは？

頭の中はもうマイナス思考のオンパレード、いつの間にか自分が震えていることにも気づいた。

「契約者だな。」

「……。」

何も言わない。男も、美琴も。『契約者』？どういう事、契約者って、美琴が、悪魔と？

嘘だ。そんなわけない、美琴が悪魔なんかと……

「そうだ。」

しかし男のその言葉で、私の希望は打ち砕かれた。

「そうか。なら、その娘ごと切るまでだ!!」

舞香さんは刀をかまえる。大きく間合いをとり、刀の柄に手を掛ようとした。でもそのとき、男が突然、両手を上げたのだ。これには、その場にいた彼以外のものが驚いた。

「こちらに戦う意思はない。刀を下げる。」

彼は手を上げたままそう言った。

『ナイツ?新しい生活』の章5(後書き)

ナイツは、次かその次に出ます。
感想・ご意見お待ちしています。

『ナイツ？新しい生活』の章6

く健一（アツ君）

「こちらに戦う意思はない。刀を下げる。」

ありきたりな言葉、こんな言葉だけで刀を下ろすとは思えない、だからさらに言葉を続ける。

「俺は悪魔落ちだ。」

「なに？」

悪魔落ち、エクソシストになるなら、必ず知っている言葉だ。

エクソシストは、悪魔を殺すための組織であるが、悪魔落ちを殺すことは、固く禁じられている。それは、悪魔落ちがあまりにも弱い存在だからだ。舞香は一度美琴に目を向け

「・・・・・・・・。」

おとなしく刀を仕舞う。簡単に俺の言葉を飲み込んだ、普通は疑うと思うかもしれないが、エクソシストの特殊能力に、契約のパスを見ることが可能になる能力がある。この能力で契約者同士のパスが直接見え、俺と美琴のパスを確認したのだ。悪魔落ちは悪魔と違い、パスが薄いため、悪魔落ちを判別するのに便利なのだ。ちなみに人間バージョンの俺と美琴のパスは、美琴が俺を呼ばない限り、パスは遮断されるためばれる心配はない。

舞香が刀を下げたところで、また歩みをを進める。

「どこへ行く。」

「食事だよ。俺はあまり好きじゃないが、こうでもしないとすぐに死んでしまう。」

それでもともと背中を上倒れている悪魔に近づく。そして羽を掴み……一気に引く。

「きゃっ。」

その酷い光景に美琴は目をそむけ、鳴海は短く悲鳴を上げる。その中で舞香だけが、冷静にしている。
俺はいつものように、それをビー玉くらいの大きさにして、食った。

「食事は終わるか。」

悪魔はとつくに消え去っていた。

「ねえ。説明して。」

それを待っていたかのように、鳴海が質問してきた。

「マスター。」

「無視しないで。」

鳴海が半分怒ったように言う。でも今はさきにやることがある。

「マスター。命令を。」

さつきから美琴は怪我をしたナルシストばかりを気にしている。

「え．．．！そうだ、シン君の怪我を治して。」

前の悪魔と今の悪魔で、俺の寿命はだいたい200年位になっている。そんなことお茶の子さいさいだった。

「オーケーマスター」

俺はすばやくナルシストを美琴の近くに移動させ、治療ヒールをかける。傷はみるみる癒え、今は眠っている。ここまで驚きながらも、静かに俺の行動を見守っていた鳴海が、もう我慢の限界とばかりに俺に質問の雨を降らせた。

「まず、なんで美琴が悪魔と契約してるの！」

はじめからすごいテンションで質問してきやがる。俺が答えようとすると、美琴がそんな俺を、自分の手で阻止し、自分が答えると、目で合図してきた。マスターの命令は絶対だ、別にどうしても俺が答えなくてはいけないわけではないので、黙ることにした。

「アツ君はね、今の鬼と同じような．．．」

「まで。」

話し出した美琴を止めたのは、舞香だった。

「さつきの生き物は、鬼とは違う。」

「え？」

美琴はやはり気づかなかったようだ。対して鳴海は、おそろくうすうすは気づいていたようだ、思ったよりも落ち着いている。

「さきのようなものは鬼ではなく、悪魔だ。」

「悪魔……。」

そう呟きながら美琴は俺を見る。

やめてくれ、その『知ってたでしょ』みたいな視線。

「それだけだ、続ける。私も聞く義務がある。」

それはそうだ、なにせ下界の悪魔を取り締まるのがエクソシストの仕事だからな。

「わかりました。」

それでは改めましてと美琴が話し始めた。

「アツ君は、あの悪魔に襲われて、瀕死の状態の私をを助けてくれて……。」

それから、美琴は自分が知っていることを必死に話した。まだ契約して間もないため、あまり詳しくはわからないところもあったが、鳴海も舞香も根が優しいのだろう、それで許してくれた。

その間俺は暇人、草むしってました。そして、美琴への質問タイムが終わり、今度は俺からの質問タイムがやってきた。

『ナイツ?新しい生活』の章6(後書き)

感想・ご意見待ってます。

『ナイツ?新しい生活』の章7(前書き)

遅くなりました。

『ナイツ？新しい生活』の章7

く健一（アツ君）

「説明、終わったか。」

終わったと思うが、一応聞いておく、このときなぜか鳴海に睨まれた。何ですか……。

「終わったよ、アツ君。」

そんな鳴海とは違い、やわらかい笑顔で俺に返事をくれるマスター。鳴海から『アツ君って、もうあだ名で呼ぶ仲に、お母さんは認めません！』と意味のわからないことを言っている。そんな鳴海に突っ込みはじめると、止まれなくなる気がしたので、無視して質問することにした。

「そのエクソシストはいいとして、何でこんなところに、おまえら3人がいたんだ。」

この質問だ、美琴の神経を借りて、ここを見たときから気になっていたことだ。

「そんなの、あんたには関係ないでしょ。」

鳴海がそっぽを向きながら言う。

「関係ならある。」

「どんな。」

「美琴は俺のマスターだ。」

関係ないわけないだろ、おまえの耳は節穴か！！さっきから何度も言ってるだろ。

「ぐっ。」

これには鳴海も言葉に詰まるが、やがて開き直り

「散歩よ散歩。」

と言ってきた。その間に鳴海は右手の親指を、左手で力リ力リしている。これは鳴海の嘘をつく時の癖だ。相変わらずわかりやすいやつだなっと思った。

「こんな時間にか？」

そんな奴を追い込むのは嫌いじゃない。

「それは……。」

だからドンドン追い詰める。

「しかも、入ってはいけない時間なのに、わざわざ学校へ。」

ここまで来ると鳴海はおろおろし始める。

「言いつけるぞ。」

この言葉に鳴海は目を輝かせた。・・・俺の狙いど通りに。

「残念でした、学校の許可必要ないのよ。」

「なぜ？」

だんだん鳴海が調子にのりだしぺらぺら喋り出す。

「なぜって、私たち3人は何を隠そう、『ナイツ』だからよ。」

「ナイツって何だ。」

「ナイツって言うのは、『神界管理局』で、鬼を退治するために選ばれたエリート集団よ。あつ神界管理局って言うのは、なんかわからないけど、『神界』って言う世界に影響されてできた歪み、いわゆる鬼とかを倒す組織何だって。まだ詳しいことは知らないけどね。」

なるほど、鳴海がぺらぺら喋ってくれたおかげで、いろいろわかった。おそらく、マスターやナルシストもその『神界管理局』とやらに所属しているのだろう。にしても『神界管理局』か、気になるな。おそらくここからは、エクソシストに聞いた方が詳しくわかりそうだ。

「どうもありがとう。」

一応いろいろ教えてもらったから、お礼は言っておくことにした。

「え……あつ!!!。」

鳴海は今頃気づいたらしい

「あんだなんてことを」

「君が勝手に話しはじめたんだ、俺のせいじゃない。」

そつだ、あくまで言ったのは鳴海、俺は悪くない。

鳴海は俺に襲い掛かろうとした。しかしもちろんこれを黙って見て
いられるほど、マスターの肝は座ってない。

「鳴海、ストップ。アツ君もあまり鳴海を苛めないで。」

注意されたじゃないか、まあそんなことはどうでもいい、本題には
いろつ。

「美琴止めないで！あの男だけには私のかわいい美琴を渡すわけに
はいかない。」

「何言ってるの鳴海い。」

こっちは取り込み中みたいだが、おそらくこいつらも聞いておいた
ほうがいいだろう。

『パンツ』

俺は手を一度たたく、これは『パチル』と言う魔法で、周りの人を
注目させるために使う、普通の魔法だ。この魔法により一同が俺を

ナルシスとはのそく

向く。

「なに？」

鳴海もパチルくらいは知ってるようだ、さっきとはちがい、ちゃんと話を聞こうとしている。そんな鳴海を待たせるのは悪いと思った俺は、早速本題にはいることにした。おそらくこれで、『神界管理局』の『裏』が見えてくるはずだ。

『ナイツ?新しい生活』の章7(後書き)

説明文がよくわからなかった人はドンドン質問してください。
感想・ご意見お待ちしています。

『ナイツ?新しい生活』の章8(前書き)

途中で切れます。

『ナイツ？新しい生活』の章8

「健一アツ君」

「舞香さん、あなた神界管理局の人間だな。」

根拠も何もない俺の勘、しかし確かに舞香さんからは、他の3人と似たようなにおいがしている。自慢ではないが、俺は自分の勘にそれなりの自信がある。

「そんな分けないでしょ。」

そんな俺の勘にケチをつけるやからがいた。俺の幼馴染こと鳴海、こいつはまだ俺に突っかかるつもりらしい。情報を抜き出すにはいいが、すぐ突っかかるところがたまに傷かな。俺は仕方ないので鳴海に視線をかえる。そのいとに気づき鳴海は話しを続ける。

「私たち3人は、ナイツのなかでも5つの指に入る実力者よ、舞香さんほどの実力者を持った人間を、同じ組織にいるのに3人とも知らない、そんなの……」

鳴海は一度言葉をきり、難しい顔をする

「ありえないわ。」

しばらく沈黙の時間が流れる、今日の風はやけに冷たい。そんな中ではじめに口を開いたのは俺だった。

「だから何だ。」

鳴海は、はじめこそ驚いたが、それからまた突っかかってきた。

「だから何だってあなたねえ。」

しかしそれ以上喋らせるつもりはない

「俺は舞香に聞いているんだ。」

そして視線を舞香に移す、しかし舞香は何も言わない。自分からは言わないつもりらしい、しかし言ってもらわなくてはこまる。主にこいつら3人の今後が・・・

「舞香さん、話してもらえませんか？」

「・・・・・・・・」

それでも口を開かない。おそらくそれほど重大な機密事項なのだろう。

「美琴はすでに俺と契約している、隠しても仕方ない。それよりもこの俺の力を有効活用する方が利功だと思っぜ。」

またもや沈黙、俺がまた口を開こうとすると、その前に舞香がやっ
と話し出した。

「わかった。話そう。しかし、その悪魔。」

そう言って俺を指す。正確には悪魔落ちだけど……

「お前にも質問に答えてもらう。」

「そんなことならお安いご用さ。」

質問しただけど、できる限り答えてやることにしよう。

「なら話そう。神界管理局の『裏の顔』について。」

俺が欲しかった答えだ。やっと話しが進む。

「神界管理局の裏の顔って、それどういうことですか。」

画面の前の皆さん、この質問が鳴海のものだと思った方が居るかもしれないが、鳴海はこんな丁寧に質問できない、よってこの質問はマスターから来た質問だ。これから話すと言っているに、この2人は人の話を聞かないのだろうか、鳴海は別としてマスターまで質問するなんて、もしかして鳴海に汚染されたのか、これから少しずつ浄化してもらおう。……だれに？はつきり言ってまともな人間は俺の周りにはいない。いままではマスターが1番まともだったから……。

そんなマスターの質問を完全にスルーして話しはじめていた。

「その悪魔が言うように、私は神界管理局の人間だ。」

舞香は静かに話しはじめた。神界管理局の……裏側について

「しかし、俺が所属しているのは、神界管理局のなかでも『エンジンシールド』という、表では公開されていない裏の組織だ。」

ここで鳴海がマスターが質問するかと思ったが、ようやく学習したらしく、今はおとなしく話を聞いている。鳴海の機嫌は悪そうだが、おそらく質問しようとしたがマスターに止められたのだろうな。

「エンジェルシードという組織は、表の舞台ではほとんど仕事をしない。エクソシストを表で動かすのは危険だからだ。」

「なんで!!。」

鳴海はどうやら我慢の限界だったらしい、いままでより少し大きめの声で質問してきた。

「それは、一般の人に悪魔や天使の存在を知られては、この世界のバランスが崩れるからだ。」

この質問には俺が答えた。しかしその分余計な言葉を入れてしまった。

『天使?』

鳴海とマスターの声がハモッタ。きれいに決まっていたきがする。こんどは舞香が答えた。

「悪魔がいれば、天使もいる。つまりはそういうことだ。」

「ちなみに、悪魔と天使の違いは、天使は悪魔と違い、願いを1つだけ、代償なしに叶えられる、そのかわり数は悪魔よりもずっと少ない。」

「天使ってすごいんですね。」

マスターが言う。しかし天使と言うだけで、すべてが善人と言うわけではない。そう言いそうになる自分を抑える。

「でも悪魔はともかく、天使の存在も隠す必要がどこにあるの？」

「鳴海。」

「呼び捨てにしないで！！」

めんどくさいので呼び捨てにしたら、攻撃された。俺はそれを軽く避け、話し続ける。

「天使が少ないといっても、悪魔はかなりいる、悪魔を知っている人間がいれば、そいつの所によることが多いんだ。もしみんなが悪魔の存在を知り、天使を呼んだり、めちゃくちゃに願いを言っていたらどうなると思う。この世界は大混乱、世界が滅亡してもおかしくない。」

「なるほど。」

「だから神界管理局のなかでも、上層部のものにしかエンジェルシードの存在は明かせないんだ。」

「おまけに普通の人間では、どんな魔法を使っても、悪魔にはかなわない。だからわれわれのような『天使の加護者』いわゆるエクソシストが必要なんだ。」

『ナイツ?新しい生活』の章8(後書き)

今回は、説明が長くなりそうなので、世界観の説明が一度はいりません。

感想・ご意見お待ちしております。

『ナイツ?新しい生活』の章9（前書き）

今回はほとんど説明だと思いますが、たぶん読んどいたほうが今後の
のはなしがわかりやすいと思います。

『ナイツ？新しい生活』の章9

「ここからまとめて説明するから、ここからはの質問はあとにしてくれ。」

まず最初に釘をさした。

「舞香、ここからは俺が説明をする。そのほうが手っ取り早い。」

「わかった。」

本当は舞香に説明してもらうのが1番なのだが、それだと丸1日かかるそうなのだ。

「まずは、さつきから気になってると思う『加護者』についてだ。おそらく、戦ったマスターと鳴海にはわかると思うが、あの悪魔と言う存在はお前たちのような人間にはとうてい適う相手ではない。それはわかっているな？」

この質問に、2人はコクリと頷く。

「わかっているなら、舞香が異質というのも理解できるはずだ。」

この言葉で舞香が少し暗くなった。鳴海ほつも、なんとか爆発しそうな自分を抑えている。

「しかしただの人間が勝手に舞香のようになるわけではない。舞香のような強さを手に入れるには、天使か悪魔の『加護』が必要なんだ。この加護を受けた者を『加護者』という、加護者は、契約関係

とはまた違う、この関係をもつと、加護を受けたものは、悪魔か天使との戦闘時、絶対に適わないはずの悪魔や天使を倒すことを『許される』。

「……わかった説明する。さっき許されるという言い方をした
がこれには理由がある。」

本来、人間が天界の生き物、つまり天使や悪魔を倒すことはできないんだ。これは世界のルールと言ってもいい、生き物がいつか死ぬ、それと同じ、当たり前のことなんだ。

しかし、そこにもイレギュラーはいる、舞香のような加護者だ。この加護者は、天界の者、つまり天使や悪魔の守護を受けることで、天界の者の魔力を、自分の魔力に混ぜるんだ。そうすることで、世界はその人間の攻撃を『天界の者』の攻撃と判断し、傷をつけられるわけだ。」

説明するのも結構疲れるな。

「それじゃあ、ここまで理解したところでエクソシストについて説明する。」

エクソシストとは簡単に言えば加護者のことだ。それも一流の……。このエクソシストは主に契約史にそむく行為をした悪魔や天使の処理、または人間の確保を仕事にしている。契約史って言うのは契約についての法律だと思ってくれ。そう考えると、エクソシストは天界の警察的存在だな。

これでだいたい説明した。

「質問は？」

一応聞いておく。

「悪魔落ちつてなに？」

おとなしく聞いていた鳴海が言った

「簡単に言えば天界を追放された者だ。」

「どんな奴とかが悪魔落ちになるの？」

ストレートに聞く奴だなおい。少しは空気を読んで欲しい。でも隠しても仕方ない。

「主に大罪を犯したりしたものだ。」

「大罪？」

鳴海さんはそこまで言わせますか。あきれを通り越して、尊敬しますよ、その空気読めなさに。

「いろいろある。大量無差別殺人に違法契約、それに……」

「、レイラは助からない。助けられないこともないが、それは……大罪だ。」

昔言われたことを思い出す。それとともに、自分の罪も。もつとも、俺は後悔はしていない。俺のしたことは、たとえ大罪を犯してでも、やらなくちゃいけないことだったと思うっているから。

「ねえ。」

おっと、少しの間自分の世界の飛んでいたらしい。

「ああ、まあそんな感じた。」

今頃気づいたが、この鎧、結構蒸れるな、気持ち悪い。

「まあ、そんな感じで、納得いったか。」

もう疲れた。帰りたい。契約中ってすごく疲れる。俺の中の『あいつ』が戦いたいと暴れるから。

「まあ、これくらいでだいたいわかったわ。」

「大丈夫です。」

「あつ、あともうひとつ。」

まだ何か質問が？

「私も、その加護者になれるの」

「ああなれる。」

『ホント！？』

鳴海とマスターの顔がちかい。

「本当だ。2人とも俺の加護者になればいい。」

そのとき、舞香が突然叫んだ

「そんな！測定不可能なんて！！」

どうやら俺の魔力を測定したらしい。驚くのも無理はない。なにせ、悪魔落ちでここまでの魔力を持った者なんて、俺くらいだ。

「どうしたんですか、舞香さん？」

マスターが心配して聞く。

「こいつ、悪魔落ちなのに魔力レベルが94なんだ。」

これには鳴海もマスターも驚く。

「お前、美琴とかいったな、おまえとんでもない奴と契約しちまっ
たみたいだぞ。」

そのあと舞香の質問攻め、結局つぎの休みに、1度エンジェルシ
ードにいき、加護と俺の件について決めることになった。これで俺
は帰れる。

その日俺が布団に入っただのは、もう周りが薄明るくなったところだっ
た。

『ナイツ?新しい生活』の章9(後書き)

最後の方のデータが一度消えたので少し変ですが、よんでもらってありがとうございます。

『ナイツ?新しい生活』の章10(前書き)

しばらくおきましたが、新キャラ登場です。

『ナイツ？新しい生活』の章10

ピピピピピピ・・・カチャ

今日は、今日こそは止めることができた。これもこの目覚ましをくれたお袋たちのせいか・・・。でも眠いな、もう一度寝る。

俺は

眠気に負けもう一度寝ることにした。情けないと思う人もいるだろうが

対外の人はこの眠気に負けると思う。なぜなら、俺の今日の睡眠時間は、たったの2時間なのだ。これで2度寝すると言う方が酷というものだ。

しかし、俺がその日2度寝することはなかった、別に眠くないわけじゃない、眠れるならば寝たかったさ、ええそうですとも寝たかったですとも、でもねえ・・・。

「ん、んん・・・。」

「・・・。。。」

誤解されないために一応言っておく。

ここは俺の部屋だ、まだ荷物には手をつけてなく、散らかったままの俺の部屋だ、そのはずだ、そのはずなのだが・・・。

「・・・っ・・・あれ？」

「・・・。。。」

「あの・・・えっと・・・。。。。。。こんにちは？」

「こんにちは？じゃねええ！！何でこんなところにいる！！てか誰だ！？」

そう、ここは俺の部屋、なのにその俺の部屋に、青い短めの髪、それに赤色の眼鏡に大きめな目の『美少女』がいた。しかも……

「……アナタハ、ナンデフトンノナカデ、マルマツテイルノデス力。」

そのまま聞くと変態に成りかねないので、できるだけ興味がないうに聞こうと思ったが、逆に怪しい言い方になってしまった。

「えつと、その……」

その質問に少女は顔を赤く染める。わかっている、わかっているともし、なんでこの少女が何で赤くなるのかも、こんなこと聞く俺が変態と変わらないのも、わかってはいても、現実を否定したいこと時にはあるでしょ？。それはまさに今の俺の心境だ。

その俺の心境を知ってか知らずか、少女は顔を真っ赤に染めたまま

「服は……その……ないっす……」

と言った。

「……………」

もう何も言わない、考えない、……『僕は誰、ここはどこ』。
効果なし、うん、むなしさが襲ったね。あと気になることがひとつ、さっきからあの少女にガン見されてるんですけど。さっきからやけ

に冷たい汗が背中を流れてる、ここは声をかけるべきなのだろうか・
・・・。

「あの、服。」

「服。」

何だこの少女は、まさか俺を服泥棒と勘違いして・・・・・！！

「ち、違うぞ！俺は何も知らない！起きたらおまえはすでにそこにいたんだああー！！。」

もうほとんどパニック状態、自分で何言ってるかわからない。こんな場合どうすればいいんだっけ・・・・・。ってそんなことの対策法あるわけねええ。『起きたら服のない少女が布団にいた時の対策法』なんてものがあつたら逆に驚くわー！！
でも、そんなパニック状態も長くは続かない。

「そんなんじゃないくて・・・・・できれば服を借りたいんす。」

本当に俺は何をしているんだろう。はじめからそうすればよかったじゃないか。

少女が着替え終わり、やっと落ち着いてきたところで、俺は慎重に質問した。

「あなたはいつたいどこのだれで何で俺の布団のなかにおまけに・・・・・。」

「ストップす。そんなに一気に聞かないでほしいっす。」

どうやら冷静に聞いていたつもりが、まだパニックから立ち直って
いなかったらしい。深呼吸だ、すうすうはあ、すうすうはあ……。
・なんか違う気がしたけれどまあいいだろう。落ち着いた。

「じゃああらためて、君は誰だ。」

「ぼくは、天使のピークイ。」

天使だって？なんでこんなところに。まあ、別におかしいことでも
ないか、天使は侵出きぼつ、いづどこに現れるかわからない、それ
が偶然俺のところだっただけ、何もおかしいことはない。第一、俺
の場合存在自体が異質だから、まわりで変なことが起こるのはあた
りまえだ、実際に前住んでいたところではいろんなことに巻き込ま
れた。

しかし、見た感じ願いを叶えに来たわけではないようだ。

「天使がいつたい俺に何の用だ。」

大体のことは予想できる。

「君の監視を監視するようにという命令をつけ、ここに来たっす。」

やはりな、天使が来るなんておかしいと思ったよ、天界うえのやつらは
できるだけ俺との接触を避けている、まあ、天界にいた頃の俺のイ
メージは最悪だからな。おそらくこの話し方が変な（もともとらしい）
少女は生贄のようなもの、天界から見捨てられたと言っても過
言ではない。だからといって、天界も天使が減るのは困る、それで
もこの子を送って来たということは、天界で何かが起こってるとい

う意味だ。最近増えて来た悪魔の出没となにか関係があるのだろうか。

「だから、今日からここに住みます。」

「……………はい？」

「いまなんと。」

「今日から住む。」

あはは、さっきより短くなった♪。

「……………なんでなんだああ!!!!!!!!?????。」

俺は目立つのが嫌い……………のはずだよね?。

ここまできたら運命だな。

そんな風に思う俺だった。

『ナイツ?新しい生活』の章10(後書き)

サブタイトルやイベント募集中!!!

番外編 それはある日の昼休み（前書き）

ちよつと息抜き

番外編 それはある日の昼休み

「健一」

「はあああああ！！！」

思わず怒りを含んだため息を出してしまった。何でため息が出るかというと、すべては今朝の出来事のせいだ。あの後俺は何とかピクイを説得しようとした、おもに「若い男女が同じ屋根の下」なんちゃらとか「食費が」なんちゃらとか。でも彼女は

「命令つすから。」

の一点張り、聞く耳を持つてくれない。仕方なく俺は、彼女の同居を認めた。あくまでしかたなくだ。

そんなわけで、今俺は怒りやら呆れやらでため息をかいてるわけだ。それに、はじめこそあんなこともあつて話しかけてくれたが、あれからはまったく話しかけてくれない、どうやら俺を警戒してるらしい。最後に発した言葉といえは

「僕は暴力には屈しませんっす。」

だった。

ちなみに朝食はどっかで勝手に食うらしい。食費はどうしてるんだるか。

しかし、そんなことがあつても、時間は進むものだ、あれこれ放してる間に登校時間はとくに過ぎていて、今はおそらく4時間目、体育の時間、うまくやれば授業に紛れることができる。

結果から言おう、失敗しました。みんなの魔法の爆発にまぎれて張り込むはずだったんだが、そこで問題がおきた。

「ケンちゃん！」

俺の知り合いに見つかりました、しかも大声で呼ばれたため、先生どころかおそらくこの学園の20分の1の広さの中にいた者には聞こえたのではないだろうか。ちなみにこの学園は、見た目こそふつうの高校くらいの大きさに見えるかもしれないが、実際は空間を捻じ曲げてそう見せているのだ、本当の大きさはおそらく軽く東京くらいだろうか、はじめ俺もおどろいた。しかしまあ、人間の（悪魔だけ）適応力はすごいもので、もなれた。ああ、言い忘れたが、学園の生徒はみんなこの学園内の寮に住んでいる。

「おお、浅野。随分遅い登校だな。それも俺の授業に堂々と……」

そんな感じで失敗したわけで、校庭を強化魔法を使わずに30週やらされた。別にきついわけではないが、ここで苦しそうにしないと多分人間じゃないから疲れた振りをした。意外と振りつて疲れるんだよね。そんなランニングが終わりちようど授業も終わった。これからお昼だが、今日俺に昼飯を作る暇があるはずもなく、もち金も0

『ぐつつつつつつ』

「ケンちゃん、ご飯まづくなるから黙って。」

そんな腹ぺこ状態で突っ伏している俺の目の前では、

「ふん、なんでこんな平民2人に、鳴海と僕の食事を邪魔されなくちやいけないんだ。」

「まあまあ、浅野君、気を悪くしないで。」

「いいのこいつは、そんなことより美琴を邪魔者扱いしないで、私にとってはシン、あんたこそ邪魔者よ。」

「照れなくてもいいよ。」

美琴（人間のときはマスターとは呼ばない）、鳴海、ナルシストが弁当を広げている。嫌味か！！

ここは屋上だ。そしてなんかみんな機能のことで会議中、しかも俺の目の前で。普通そうゆう話は部外者には聞かせちゃいけない気がする。

「あの、鳴海。」

「なに美琴。」

「浅野君が居るんですけど、いいんですか。」

そうだ、美琴も言ってるじゃないか。

「いいの、いいの、わかりっこから。」

ひどい言われようだな、俺はどれだけ馬鹿だと思われているんだ。

全部わかってますよ、そこに俺居たよ。そんな俺の気持ちは知らないであろう、遠慮なく天界のこととか話してる。

「そんなことより、美琴。本当にあいつになんか変なことされてないでしょうね!!」

「ないよそんなこと!!第一、まだ2回しか呼んでないし・・・」

いつの間に俺の話題になっていた。

「なんだなんだ、何の話だ。」

これにナルシも加わる、昨日の話はしたが俺のことはまだだったらしい。てか俺鳴海に嫌われてんな、やはり中身の問題なのかな？

「呼ぶって、あいつって呼ばないとこないの？」

「そうだよ、アツ君は呼ばないと来ないし、そんなに悪い人でもないよ。」

ああ、でも美琴には好印象だったようで、ちょっと嬉しかったり。

『ぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつ』

そんなわけで俺の空腹も治まらないまま昼休みは終わった。

番外編 それはある日の昼休み（後書き）

次回。 ついにエンジェルシードに……。。

『組織に入団』の章々厄介ことはいつまでたっても厄介（前書き）

組織は次になってしまいました。

『組織に入団』の章へ厄介ことはいつまでたっても厄介へ

へ健一へ

今日は学園が始まって最初の休日である。そして神界管理局に行く日である。しかし俺はまだ健一のままだ、美琴の奴、俺のこと忘れてんじや。そんなことはない信じよう、きっと鳴海が呼ばないようになると言ってるのかもな。ちなみに、ちなみにだが、この前美琴と約束した呼び捨ての件はこの前すっかり忘れていたせいで、おそらく2時間口スしたな、今度から忘れないようにしよう。そんなこんなでやることもない俺。とても暇なはずの俺、しかし、そんな俺にプレッシャーを与える存在がいた

(ジイイイイイイイイイ)

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

(ジイイイイイイイイイイイイイイイイイ)

俺の監視役ことピークイが、監視のつもりなのだろう、さっきからじつとこっちを見ている。さすがに気まずい、なぜか朝起きたらこの状態だった、今日、悪夢を見た気がする。そういえば、こいつ俺の契約のこと知ってるのかな、怪しまれたり口を滑らしたらやばいからな。

「おいピークイ、俺契約してるから時々居なくなるけど、気にするな。」

俺はできるだけピークイから視線をずらし言った。……意外と威圧感があるんだよなこいつ。しかしピークイは無言、何も言わない。不安だ。こいつ、なんか嫌がらせで周りの奴らに言いふらしそう。不安でたまらなくなった俺はもう一度釘を刺すそうとし口を開いた。ちょうどそのときだった。

『アツ君、来て。』

美琴からの呼び出しだ、やっと来た。別に待ち遠しかったわけではないが、この空間から逃げられると思うと、飛び上がりそうなほど嬉しかった。俺の体は悪魔の鎧に包まれ、そして次の瞬間には学園の前に俺たちは居た。

「健一（アツ君）」

俺たちは居た。そう『俺たちが』居たのだ。当然このたちは美琴たちのことではない、なら誰か、それはもちろん奴しか居ない。

「美琴。なんか一人増えてない？」

「おかしいです。私アツ君しか呼んでないんに。」

「これが美琴の悪魔か。」

俺たちは3人にまじまじと見られる。俺の隣では、そんな状況にもかかわらず、顔色一つ変えない。もうここまで言ったらわかるだろ

う。俺がここに来る前に一緒に居たピークイだ。そのピークイが、なぜか俺の隣に居る、どうしてついてきたのでしょうか、俺は君から逃げたいのに。泣いてもいいですか？

おそらく質問しても答えてはくれないだろうから、あえて質問はしないことにした、聞いたら負けだと思う。

「あなたは誰？」

ははは。鳴海。おまえは馬鹿だな、そいつがそんな質問答えるわけ

「ピークイ」

あつたね。

すごく悔しいです。なんか勝ち誇っていた自分が恥ずかしいです。

どうしてです。どうしてですか。俺の面はそんなに悪人面ですか・
・・・

「ピークイ？変な名前ね。」

鳴海が言った。当たり前だ、人間界の名前と天界の名前を比べてどうする。鳴海はおそらくこの子が天界のものだなんて気づいていないのだろう、俺と一緒にすることは悪魔の類のものだと推測できると思うのだが、そんなものを鳴海に求めはいけない。鳴海は昔からそうだ、頭を使う前に行動。それが鳴海スタイル、無鉄砲で危険だが、こんな鳴海は嫌いじゃない、というか憧れる、考えないでただ突き進む、俺にはできない。俺は何かも考えてからじゃないと動けない、というより損得を先に考えてしまうのだ。だからいつも悪魔の餌になってしまった人間を見殺しにしてきた、助けても特はないから・・・・でもそんな俺でも変わったのかもしれない、少しづつでも、美琴と契約した時みたいに・・・・少しでも『

人間らしく』なれたのかもしれない。

「こいつはおまけみたいなものだ。気にするな。」

「つつ!！」

そんな俺の一言に反応するピークイ、少し怒らせたらしい。

「あんた、正体ばらすつすよ。」

本当に怒っていた。一応俺の正体立場を知っているらしい、調べたのだろうか？なら契約のことも知っていて俺の契約を少しいじり一緒に呼ばれるように設定していてもおかしくない。おそらく俺の予想は十中八九あっているだろう。だとすると、ここで逆らうのは得策ではない。

「このお方は私の監視役の天使様です。」

丁寧の説明した

「まあ、いいつすよ。」

難は逃れたか……。

しかし、こんな会話を聞いて黙っていない人間がいる。

『（アツ君）こいつの正体？』

美琴と鳴海である。

「ねえこいつの正体ってどういうこと。ピークイ。」

まず質問したのは鳴海。予想道理といったところだ。というかそんなことはどでもいい、今はこのピンチをどう逃れるかを考えよう。今のところピークイは黙っているが次の瞬間には何を言うかわからない、早いうちに何とかしなくては。

「私も気になります!!。アツ君の正体。」

美琴まで探り始めた、おまけにピークイは言うか言わないか迷っている。まずい、何とかしてピークイから正体がばれることだけは防がなくては、どうしようか。しかし、このピークイがそう簡単に俺の正体をばらすとは思えない、おそらく鎌をかけているだけだろう、ならここはさりげなく話題を変えるのが得策だろう。

「そ、そんなことはどうでもいい。今は舞香との合流が先だろう。」

「・・・・・・・・・・。」

無言。

俺は思うよ、この世でもっとも恐い言葉って無言だと。

俺の作戦は失敗に終わったかと思われた

「わ、忘れてた。」

「遅刻する!!。」

がしかし。どうやら成功したようだ、これで何とかごまかせた。そして俺は学園に入っていく美琴たちについて行くのだった。

そのときピークイが笑いをこらえるのを見て殴り掛かりそうになったのは秘密だ。

『組織に入団』の章々厄介ことはいつまでたっても厄介（後書き）

感想・ご意見お待ちしています。

『組織に入団』の章、知らない扉を見つけると開けたくなるよね（前書き）

台詞少なめにしました。

『組織に入団』の章く知らない扉を見つけると開けたくなるよねく

く健一（アツ君）く

「すみません舞香さん、遅れてしまいました。」

俺の正体をばらされるのを防いだ俺は、今学園の昇降口に居た舞香と合流した。舞香さんは俺たちを見つけると

「遅い！いくら待たせたらお前らは気がすむんだ。」

とてもご立腹のようだった、いったいいつから集まる予定だったんだろうか。まあ、着いたからよしとするか。

「ごまんなさい。」

美琴は涙目で舞香に謝っていた。なんか変な図だな、一応今日気づいたのだが、舞香は俺たちの同級生のあの「自分を俺と呼んでいる少女」のことだったんだ、そんな同級生相手に涙目で謝る美琴の姿は意外と可愛い。そんなことを考える俺つてもしかして本当に変態・・・いや、考えるだけならセーフだろう、なぜならあのナルシストの野郎は、いつも鳴海に今俺が考えたようなことを言っている、だから俺はセーフだ。

「ま、まあいいけど。」

舞香は意外と簡単に許してくれた。しかし、今美琴を見て赤くなつた気がするが、気のせいだろうか？。本当だとしてもなぜ赤くなつ

たのだろう、鳴海も時々俺に向けそんな顔をするが、顔が赤くなるのってどうしてだろう？。次の自由研究の課題のひとつにしよう。何がともあれ舞香許してもらった俺たちは学園の中の生徒会室に来ている。なんでも神界管理局は生徒会室から行くらしい、まず舞香が入ってはじめにしたのは生徒会室にひとつだけある本棚の下から2番目の一番左の本を引きそのままにし、それから放送室にあるチャイムボタンを押した。するとどうだろか、さっき出しておいた本が勝手にもどったかと思うと、本棚が右にずれなんかいかにもって階段が出てきた。俺は少し驚いたが、ほかのもの（ピークイも含めて）はあまり驚いていない、おそらくはじめから知っていたのだろう、美琴たちが知っているのはわかるがなぜピークイまで知っているんだ？なぞだ。

「まずはあなたたちの首領に合わせてください。」

舞香は階段を下りる前に美琴たちに言った。もちろん美琴たちに断る理由もないので、簡単にOKした。そしてついに階段を下りていく、途中までは古くて汚い階段だったが、突然白くてきれいな階段に変わった、これは魔法だろう。ちなみにさっきの本とかの仕掛けは魔法じゃなかった、おそらく魔法が探知される恐れがあったのだろつ、だからわざわざ無効化魔法をかけてるのだ、そうすることですべて普通に順序良く行動しなければ開かない仕組みにしたのだ。そんな白い階段を降りきると今度は真っ暗、まるでエレベーターに乗ったような感覚に襲われた後『チン』という音とともに扉が開いた。

そこにはもうひとつの学園があった。

『組織に入団』の章、知らない扉を見つけると開けたくなるよね（後書き）

感想・ご意見お待ちしています。

『組織に入団』の章／恋愛は自由であるべきだ／（前書き）

すいません。テスト期間です。しばらく更新できなくてすいません。

『組織に入団』の章　恋愛は自由であるべきだ

「健一（アツ君）」

それはとても不思議な光景だった。俺たちは学園の歪み、俗に言う異空間に居た。さらに驚くべきことは、もとの学園よりも何倍も広いのだ。

「こりゃあすごいな。」

思わず口から出た言葉、でもそれも仕方ないと思えるほどに広い空間だ。普通の異空間じゃここまで大きくはない。それにあの建物は何だ、あの見える限り一番でかい建物の周りを飛び回ってるまるで宇宙戦艦みたいなちっちゃいのは、普通に浮いてるんですけど落ちたりしないだろうな。俺は気が気でない、天界のそれも『白の国』でならいくらでも変な飛行物体はあるが人間界が天界ほど進んでるわけがない、一般的に知られてないことからおそらく機密事項というのわかるが安心感にかけあんの乗り物には乗りたくないな。

「どうしましたアツ君」

美琴がぼおと突っ立っている俺に気づいたらしい

「いや、少し驚いた」

隠さなくちゃいけない理由もないし普通に答えた、すると美琴は「わたしはじめは驚きましたがもう慣れました」と笑顔で言ってくれた。俺はとてもいいマスターを選んだのではないだろうか。

「そうそう、わたしも美琴と一緒にここに来たんだけど、本当に大変だったわよ」

美琴と鳴海が一緒にね。かなり意外な組み合わせだと思うな、俺から見たって美琴と鳴海の性格は正反対、似ているところと言えば異常にもてることくらいだ。あとから聞いた話によると美琴と鳴海は大親友で一身同体らしい、そんなことに今まで俺は気づかなかったのだからなぜだろう、俺があまり鳴海に興味がなかったっからか？美琴はまあ知らなかったし。

「美琴ったらパニックになってね、走り出したの。そして当然のごとく迷子になって、三日目になんと、もといた場所と正反対のフロアにいたの。」

ちなみになんで急に走り出したかはわからないらしい。

・・・俺、このマスターで大ジョブでしょうか・・・

今の話で俺はとことん心配になった。

そんなことをはなしていたら、舞香が俺たちのことを待っているのに気づいた、おそらくずっと待っていてくれたのだろう。ご苦労様です。

俺は何とかみんなの会話を止め舞香さんの方を見る。舞香さんは軽くうなづくと言明を始めた。おそらく俺とピークイは初めてここにくるからわざわざ説明してくれるのだろう。その証拠にさっき鳴海が

「説明なんかいいじゃない。あとで私がピークイに教えれば」

と言っていた。まあ！！俺の名前がないのはなぜでしょう（ハート）！！・・・すいませんでした。と、バ力はこのへんにしてこのもうひとつの学園について軽く説明だ。

この学園は『鬼』という存在を滅するために作られた組織だ、鬼についてはあまり詳しいことはわからなかった。学園の方だがここには成績が上級の人間が集められているらしく、登録された人間にはクリスタルが渡されそれを通じて命令などがくるらしい。ちなみにクリスタルの色は人によって変わるらしくなんでもその人の本質を見るとか。そして一番重要なのはここから見えるあの白い大きな建物で、あれが神界管理局の本部らしく、命令を出すのもあそこらしい。おまけにあの場所には研究所もあり、生け捕りにした鬼などを研究しているらしい。

だいたいの事を舞香さんから聞いた俺とピークイ（あまりきょうみはなさげだったが）はあらためておどろいた。そして今度は学園の中を探索することになった。それにしてもここは本当に不思議なところだな、感じてるだけの気配でここがどんな場所かもわかる、ここに来て正解だったかもしれない、おかげで神界管理局とまあ気配だけがエンジェルシードについて大体わかった、時間もまだあるみたいだし少しみんなで見回ることになった。俺たちがはじめに来たのはタウン、ここには何でもそろっていて簡単に言う大きなショッピングモールをさらに大きくしたような場所だ、外食をする時は対外がここだとか舞香さんが言っていた、マ。ドからコンビニ、ただのレストランから高級レストランまで何でもあり、ほかに洋服、文房具、電化製品、数えればきりが無い。とにかく広い、それが伝えなかったんだ

「なかなか広いだろう悪魔」

「悪魔じゃありませんアツ君です」

後ろでは美琴とシンが（ナルシでもよかったがマスターに注意された）言い争っている、別に何と呼ばれようがかまわないのになぜ美琴がムキになるんだろうか。

「美琴おゝゝあなたはあいつに騙されているだけよ！あいつは悪魔で十分だわ」

なんかそういわれるとムカつく、たしかに俺は悪魔だけど。

「ピークイもそうもうでしょ」

おもむろにピークイに同意を求める鳴海

「自分も同意権つす」

それに普通に答えるピークイ。普段めつたに……というかまったくしゃべらない彼女だが、ここ数分でみんな（俺以外）と打ち解けたようだ。それでわかったことだが、ピークイはどうやらおしゃべりな性格のようで俺以外の人間とは積極的に話している。

「鳴海まで……」

美琴は味方がいないためかシュンとする、だからなぜそこまで落ち込む。そんなこと気にしてもしょうがないか、きっと美琴はやさしすぎるのだ。

しかしこの数分の間に俺は気づいてはいけないことに気づいてしまった。

鳴海や美琴、シンはとてもモテる。そえはタウンでも例外ではなくさつきから多くの視線が注がれている、その中にはここに悪魔がいることへの嫌悪感なども含まれている、俺への嫉妬も含まれて入る

が。

はつきり言つて他人がどんな恋愛をしようと興味がないが、一人だけおかしい視線を送る人物がいる、別にその視線自体に問題はない、みんなが3人に贈る視線と同一のものだ。しかし問題はだれがだれにその視線を贈るかだ。別にいけないとは言わないが、その視線を送る人物が意外すぎるといふかその人物から創造できないことだったのだ。その人物は主に美琴や鳴海に熱い視線を贈りながら俺たちを次のところに案内しようといっていた。美しい黒髪をなびかせて、腰には大きな刀。

まぎれもない舞香だった。

（舞香）

今私はタウンについて説明している（おもにピークイとアツ君とやらのために）。しかし私は目の前の美少女たちに目を奪われていた。自分の趣味が異質なことは知っている、昔から男の子には興味がなかった、その代わり美しい少女に目がなかったのだ。そのせいでさまざまな嫌がらせを受けたし親にもいろいろ言われた。だから今まではできるだけ興味を持たないようにしていた。しかし、入学式の日、私は運命の出会いをした、しかも2人だ。教室に入りその姿を見たときとたん電流が走った。胸の鼓動は止まらなくなっていた、いつまでもときどきと鳴り続けた。それはまさに恋だった。

その2人が、今私の目の前に居るのだ、つい2人を見てしまうちょっとした仕草でドキツと心臓が跳ね上がる。でもこの思いは私の胸の奥に閉まってかなくてはいけない、叶わない恋は気づかない振りをすればいい。

『組織に入団』の章へ恋愛は自由であるべきだ（後書き）

テストが終わったなら頑張って更新するので楽しみにしてください。

『組織に入団』の章々変わったと思っ
ていても本質は変わらないものだ
(前書)

新展開で新女キャラ登場!!

『組織に入団』の章へ変わったと思っけても本質は変わらないものだ

く健一（アツ君）

俺が気づいた事はあまり触れない方がいいだろう。そう思った俺はこれ以降このことは考えないことにした、人には誰にも言えない秘密の一つや二つ……や三つや四つあるはずだ。

「そろそろ本部に行く」

舞香は俺たちを一通り案内して淡々とした口調で言った。

「やっと終わったのかい、まったく、自分の知ってることを説明されるのも飽きてきた。」

「そんなこと言わないでください。アツ君とピーちゃんはここに来るのは初めてなんですから。」

美琴はピークイをピーちゃんと呼べるほど仲良くなったようだ。ちなみにピーちゃんイテッ！……ピークイに殴られた。ちなみにピークイは美琴のことを呼び捨てにしている。そしてうまく俺とだけ話さないようにしている、俺、悲しい……。あつすいません、俺がピークイに視線を向けた瞬間敵意むき出しの視線で睨まれた、俺が何を考えたか解ったらしい。しばらくそんな感じで見詰め合っている

「行くわよ」

鳴海の不機嫌そうな声に呼ばれた。これからようやく本部にいける

らしい。

「俺に局員になれと？」

突然だがややこしいことになっている、今俺たちが居るのは本部の中心、一番偉い人が居る部屋だ。部屋全体が気品に満ちている。その部屋の中心、とても大きな椅子というよりソファの方がしっくりくる椅子に深く座り込んでいる『一番偉い人』に俺はいきなり局員になれと命令された。見た感じこの部屋にほかの人間は居ない、おそらくこいつが一番偉い人

「どうだ、君にとっても悪い話じゃない、ここの局員になればここにあるものなら自由に使えるしその方が君のパートナーを守りやすい」

確かに、俺にも断る理由はないし

「いいだろう」

別に断ってもいいのだが、その場合神界管理局を敵に回すことになる。そんなめんどくさいのは願ひ下げだ。

「そうか、隣の子はどうする」

「別にいいですよ」

ピークイも承諾したようだ。

「それでは早速手続きを」

「まて」

その前に俺は聞かなくてはならないことがある、この部屋に入ってからずっと気になっていた疑問？いやそんな生やさしいものじゃない、なんというか言葉に表せない混乱？これも何か違うがとにかくそんなところだ

「あなたが最高責任者ですか……」

「そうだ、それがどうした」

「お名前は」

「佐紀、佐賀^{さが} 佐紀^{さき}だ」

別にそれはいい、それよりも根本的な問題がある

「失礼かもしれませんが……あなたのねんれ『フィールド起動』」

「はい」

俺の台詞の上に最高責任者の言葉が重なり

「うぐっ!!」

俺は地面に倒れた、今起動したフィールドは俺の力を奪い押さえつけた。実際に何かあるわけではなく、まるで空気がのしかかってくるような衝撃だ。はじめは驚いたが我に返りちよっときつかったが立あがる周りの奴らからは驚きの声が聞こえる

「すごいな、このフィールドでも立ち上がるか。おまえ本当に悪魔落ちか？」

「いきなり何するんですか」

さっきというか現在進行形で行っていることを完全に無視して話を進めようとしていたが何とか阻止することができた。

「なにつて、アツ君だったかな？女性には聞いてはいけない質問があるんだよ」

「でもあなたは どう見ても高校せ『フィールドの質力もつと上げましょうか』いえ何でもありません」

この人は怒らせてはいけない人間だ。俺の本能がそういった、しかしそこまで俺が聞きたかったこと、それは『彼女』を見れば誰もが聞きたいと思うはずだ

「それにしてもあんたいくつつすか？」

聞いたあああ！！ピークイ聞いちゃったよ、殺される。短い間だったけど楽しかったぞ、全然話してくれなかったけど……

「それは秘密だ」

「不公平じゃないでしようか？」

「あの、何で俺の時と対応が違うんですか？」

冷や汗をかく俺はおもむろに聞く、そんな問いに対しまともな返答がくるわけではない

「女の子だからな」

この世の中、差別は小さなところに潜んでいる、男だから女だから何でそんな差別がるんだ！差別なんてこの世の中から抹殺されるべきだ、マホリン（世界魔法オリンピックの略）も男女一緒にするべきだし女の方が弱いなんて考え方もあらためるべきだ、男性は女性に支配される運命なんだあああ！！
・・・少し心の中で取り乱してしまった。

「そんなことより手続きだ」

そんなことって・・・。健一ことアツ君はひどく傷ついた。でかいドアの向こうから恐そうなお兄さんが2人入ってくる、手にはコンクリートの板みたいのと変な石を持ってきた、あれが舞香の言っていたクリスタルか？でもどう見てもただの石、色がない上にでこぼこしてる、さつき舞香に見せてもらった青くて刀の形をしたクリスタルとはまったく違う。

男たちは、佐紀にその板と石を渡し出て行った。いったいなんだったのだろうか？

「まずはピークイ、この上に手を」

「はいっす」

佐紀はあのでこぼこした石を板の上に置きピークイに手を置くようにといった。ピークイは何の疑いもなく手を置く、すると突然いたが光りだした。俺にとつては目を開けるのがやつとの光だった、しかし周りのものにはあまり眩しくないみたいだ、どうしてかな？

そんな疑問は光がやむとすぐにわかった、みんなゴーグルをしていたのだ、スキーで使うゴーグルらしく光が反射して余計に眩しかったのだ、何でもみんながそんなものをもっていたか疑問だったが、よく考えると確かに後ろの方で「ありがとうございます」という声がかくつか聞こえた気がする、男2人が帰るときに聞こえたからおそらくあの男どもが配ったのだろぅが、何でも俺にないわけ、俺に何かうらみがあるわけ！

なんか疲れてきた

しばらくすると光が治まりさっきの石の色や形が変わっていた。なるほどね、こうなるのか

「君は白で天使の羽か、君は根っからの天使みたいだね」

佐紀の話によると、普通天使はピンクや水色、黄緑など多少はほかの色が入るらしく、純白はめづらしいらしい。ピークイはおかしなしゃべり方をするがちゃんと天使みたいだ

「つぎはアツ君」

俺はもうアツ君であだ名も名前も決まっちゃったらしい。俺はなんだか涙が出そうだったが何とか耐えて板の上に手を置く、さっきと同じように強い光を放つが今度の光は平気だ、ていうか落ち着く。しかし次の瞬間――！

「ああああ！！！」

自分の心が凍ってしまっ、そう思った。恐くて恐くて足が震えた、視界が歪み激しい吐き気も襲ってきた。もうだめだと思った。・・・

それは一瞬だったらしい、それでも俺は何時間にも感じられる時間だった

「アツ君！大丈夫！」

駆けつけたのは美琴、ほかのものはこないが心配そうにこちらを見ている、一応心配してくれるんだね。ほろり・・・

「大丈夫だ。問題ない」

そうは答えてもまだ少しふらふらする。そうだ！石は・・・

「なんだいこれは」

シンが石に顔を近づけて言った。そのシンがまじまじと見ているのは俺のクリスタル、色は吸い込まれそうな黒、そして形は・・・

「何かの紋章でしょうか？」

「私もこの機関に入って一度も見たことない」

「首領は見たことないんですか」

言い忘れたがこのどこから見ても高校生のこのお方こそ3人の首領らしい

「私も毎回これにはたあっているがこんなものはじめてだ、このクリスタルは美琴ちゃんの黄緑色のハートや鳴海の青色のライオンシンの王冠のようにその人自身を写す。だからもしかしたらアッ君なら」

俺もその形を見て驚いた、いや嫌悪した。左右対称の紋章。忌々しい紋章、結局俺は変わらない、そういわれている気がした、この紋章はみんなが知るわけがない、知らなくていいのだから。

「知らない」

ぴしゃりと言い切る。これ以上この話題には触れたくない、そんな意思を示すかのように、俺は言った。みんなもそれがなんとなく解ったみたいでこの話題から、新しい話題に入ることになったみたいだ。

「で、首領エクソシストって何ですか？」

鳴海からの質問、しかし佐紀はまったく驚いた様子もなく

「舞香が説明したとおりだよ、悪魔を倒す機関それ以下でもましてや以上でもないよ」

帰ってきたのはその答え、確かにそうだな、悪魔を倒すこと以外普通の局員と同じだ、説明する必要もない。俺としてはあの鬼について知りたい、佐紀もそれがわかっていた様で説明してくれた。

鬼とは、悪魔のしもべのことを言うらしい、それなら俺も納得だ、見た感じ俺でもそんな足しにはならんが吸収できるみたいだから、悪魔とは何らかの関係があるとは思っていたんだ、まさかしもべの

ことは

「そんな話知らないわ」

それに鳴海が反応した。どうやら知らされていなかったらしい

「私たちには、正体不明の生物としか聞かされてなかったわ」

「そうだ、君たちには沿うとしか教えていない」

「それはなぜですか」

シンが久しぶりに会話に入ってきた、シンでさえもこのことは知らなかったらしい。

「それは、我々に悪魔に対抗する力があまりにも少ないからだ」

「少ない？」

「そうだ、君たちも説明を受けたと思うが悪魔を倒すには加護が必要だ、しかしその加護を行う天使が不足している」

佐紀は腕を組み考え込むように語りだした。

この機関にはどうやら天使しかいないらしい、悪魔は大概が言う事を聞かないらしくすべて科学部にまわされるらしい、科学部では日夜悪魔の研究をしているとか。俺も気をつけなくては研究材料にされかねない。

「なるほどそれで限られた人間にしかエンジェルシードのことは明かされていないんですね」

美琴が俺のほうを見ながらつぶやいた。なぜ俺を見る。俺はつい美琴を見つめ返してしまった、すると美ことは顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった、いったい何がしたかったのだろうか？

「それじゃあ一通りはなしたところで君たちに頼みたいことがある」

その言葉にそこにいるもの皆が顔を引き締める

「エクソシストに成ってはもらえないだろうか」

その言葉に皆が深く頷いたことは言うまでもないだろう。

『組織に入団』の章々変わったと思っても本質は変わらないものだ（後書

よく解らなかった人に

佐紀のみためについての説明

身長は大体鳴海くらいで髪は・・・イケメンカットみたいな感じ、
なんとなく舞香とにている。珍味に髪の色は金髪。

ご意見・感想お待ちしています。

『それから』の章々時が過ぎるのはあっというまだ（前書き）

ちよつと頑張つて長いのかきたいと思います。

『それから』の章、時が過ぎるのはあっというまだ

「シン君、後ろお願い」

「何で僕が！！」

「シン！！」

「わかったよ・・・」

何も見えない暗闇の中、うごめく影が3つ、背の高い男、いやまだ男と言うには若い少年が一人と同じく少女が2人。ここはこのセイス学園内のある公園、まだ人が起きだすには早い時間に3人は身を潜めていた。彼らの名は順にシン、鳴海、美琴、3人ともこの学園では魔力レベルが30を超える有名人だ。なぜそんな3人がこんなところで身を潜めているか、それはすぐにわかる事になる。

3人が身を潜めてから20分ほどたったところ、突然公園の真ん中に黒い影が差した。その影はじょじょに形を変え、人間に近い形になった、でもそれだけではなく、また背中 of 辺りが盛り上がり羽になった。

「やっと出てきた、この僕を待たせるなんていい度胸じゃないか」

悪魔の姿を確認したシンはつぶやいた、季節はもう冬、雪までは降らないものの外で待つにはいささか寒い、そう考えればシンのつぶやきも仕方ないといえよう。しかし、その声に悪魔は気づいたよう

だ、その何色かわからないほどに濁った色をしている目で真っ直ぐ
3人を見てから不適に笑った。

「やば」

「気づかれちゃったね」

抜けたことを言う美琴、ほかの2人もそうだが、美琴たちに焦った
ようすはない、それどころか余裕さえうかがえる。

『ダレダ』

悪魔の声はとても聞き取りにくくおまけに単調だった、しかしそんなことはこの3人には関係ない。なぜならこの3人に課せられた『任務』は、この悪魔を倒すこと、ただそれだけ。

3人は早速戦闘態勢に入る、しかしこのままでは勝ち目はない

「美琴」

「わかりました」

彼なしにでは

（健一（アツ君））

俺がエクソシストの一員になってからもう半年以上が過ぎた、あの日からの俺の生活はとてハードなものだった。

朝は普通に学園に行き、夜になれば悪魔としてまたエクソシストとして悪魔や鬼退治時々朝も呼ばれるが無視している、美琴たちも同じ任務をこなしてきたが、彼女たちの場合は特別休暇がとれ、学園を休んでも単位はとれる。しかし俺は違う、エクソシストはあくまでアツ君であり俺ではない、だから休暇も取れないのだ。おまけに疲れて休んだりしたら正体がばれる可能性がある、ピークイと一緒に暮らしてるだけでも鳴海にばれる確立があるというのにこれ以上めんどくさいことになってほしくない、クリスタルも家に置いていけないので持ち歩いてる。俺の正体隠しとおせるか心配だ。

『アツ君』

今夜もお呼び出しのようだ。俺は『停止状態』だった体を起こし闇を纏っていく。俺は浅野健一から悪魔のアツ君へと意識を切り替える、さあ任務に出かけよう。

「あ、来た」

「美琴、どうかしたか？」

「こんな時間に呼び出してごめんね、でもアツ君1度も自分から来てくれないから・・・」

美琴は少しすまなそうな顔をしている。美琴の言うことも一理ある、

確かに俺が自分から任務に参加したことはない、というよりこれないのだ、浅野健一からアツ君としてみんなの前に出るのに一番正体がばれにくいのが美琴に召還されることだったのだ、だから俺は自分から任務に行くことはない。おかげでほかのエクソシストやナイツには『サボリ常習犯』と呼ばれている。そんなことを言われているわりには毎回美琴に呼ばれている。なんか・・・いや言わないでおこう、おかげで定期的に寿命を確保できるからいいとしよう。最近わかったことだが、鬼を食べてもあまり寿命は延びないらしい、簡単に言うと気晴らし程度にしかない量だ。

「そろそろ始めたいんだけど」

動かない俺たちを見ていたシンが話しかけてきた。どうやら敵さんがこちらに近づいてるらしい。

「わかった」

俺は俺の仕事をする

「契約発動」

美琴、鳴海、シンのクリスタルが光る。これが俺の仕事だ。俺がエクソシストになった時、3人の加護をするための天使が居なかった。俺が3人分引き受けることになったのだ。そのとき佐紀にやめとけと言われていたが、俺の魔力レベルを見て何も言わなくなった。ちなみに今も順調に魔力は増え続けている、これも定期的に『食事』をしているからだ。でも毎回思うが

「だるい」

「それくらい我慢なさいよ」

「お前に何がわかる」

そう、だるいのだ。仮にも3人分の加護をしているのだ、これがだるくないわけがない。ふつう加護は1対1で交わすものであり、そんな何人もやるなんて例外中の例外、俺くらいしかできないだろう。おまけにこの3人の実力も考えて、通常の倍以上力を与えているのだ。感謝してほしい。

そんなことをいままさらグチグチ言うつもりはない、それより戦闘だ。いつてもほとんどやることはない、はじめこそ俺がほとんど戦闘をしていたが、今回みたいに雑魚の場合はこいつらに任せ、戦闘訓練の代わりに行っている、はじめに比べればいくらか余裕が出てきたし、今度もう少し強いのと戦わせることにしよう。

「シン!!じゃま!」

「邪魔なのは君だ!」

「……やっぱりやめとこうか……」

俺が少し目を離れた隙に『また』鳴海とシンが喧嘩を始めた。この2人はいつもそうだ、どうやら2人は思考回路が似ているらしくいつも同じ場所で居合わせてしまう。本当はどちらかが裏をかいてフオーメーションをつくるべきなのだが、この2人にそれを求めるのも酷だというものだ。

『うるさい』

どうやら鳴海とシンの喧嘩が相手さんを刺激したらしい。悪魔はすでに戦闘体制に入っていた。

「喧嘩は後にしろ」

一応は助言しておく、でもこれだけでは聞かないので『餌をまく』

「こいつをうまく倒したら、少しレベル上げてやる」

『本当!』（鳴海&シン）

どうやって移動したのか、2人はすでに俺の目の前に居た。さっきまで悪魔をはさんで向こう側で喧嘩していたと思ったのは俺の幻覚だったのだろうか。

「本当だ」

2人の目はとても輝いている。そんなに強い奴と戦いたいのだろうか、きっと鳴海が俺に暴行をくわえるのはきつとストレスが溜まっているからなんだな、今度からはもっと強い奴と戦わせることにしよう。

『うるさいうるさいうるさい!』

悪魔はどうやら痺れを切らしたらしい、いきなり襲って来た。

「シン、美琴」

「わかっている」

「私もいいよ」

鳴海の合図で3人とも構える。構えるといっても少し姿勢を低くする程度だ、3人ともまだ体術は未熟だがその代わり魔法をうまく使っている。

さつきとはまったく違う、悪魔を三角形に囲み油断なく悪魔を見つめる。悪魔はというと、3人が自分を囲んでいることで誰を攻撃していいかわからないようだ、しばらく誰も動かなかった。そんな中ではじめに動いたのはシンだった。

まず一步前に出て砂を払い悪魔にかける。悪魔は瞬時にそのシンに反応し砂を羽ではらう。しかしそこで美琴が動き出す

「『ウエンター』」

水魔法のウエンターは、水を音速で飛ばしダメージをくわえる技であるがこの場合は少し違う、美琴が打ったウエンターに向かって放たれる赤い光、それは間違いなく鳴海のファイヤーボールだった。鳴海の放った炎は美琴のウエンターを直撃し水蒸気を巻き上げる、その水蒸気は悪魔の視界をふさぎ、3人の視界もふさいだ。

「シン君お願い」

「わかった」

そこでシンが出る、シンは呪文の要らない簡単な風魔法で霧を操る。だんだん3人の視界が開けてきて悪魔に霧がまとわりついてるような形になる。

「じゃ、今日はあたしでいいね」

鳴海のご機嫌な声、それに美琴は笑顔でYESと答えシンは「仕方

ない」といいながらも鳴海に譲った。

「行くわよ」

鳴海は両手に魔力を集める。その魔力はどんどん膨れ上がりバスケットボールくらいの大きさになる

「『ウォール』」

鳴海は悪魔に向かいその膨れ上がった魔力の塊を投げつける。自然に霧が晴れ悪魔はやっと自分の状況が把握できた、しかし時すでに遅し、魔力の塊は悪魔を打ち抜き爆発。悪魔は地に落ちた。

今日の任務も無事終了した。俺は食事をすませ次の日のために眠りについた。

『それから』の章々時が過ぎるのはあっというまだ（後書き）

3日に1話程度で頑張ります。

ご意見・感想お待ちしております。

『それから』の章々新しい友達々（前書き）

今回は短いですがご勘弁を・・・。

『それから』の章へ新しい友達へ

時は12月はじめ。この時期は全国各地がクリスマスムードになって、同時に寒くなる季節である。それはこのセイス学園も例外ではなく、浅野健一こと俺は布団の中で寒さと眠気に襲われていた。

「サミーネミダー」

目覚ましを止めてから何度この言葉を言ったかもう忘れてしまった。でも仕方ないじゃないか、昨日は任務だったし・・・。
まあ何がどうあれ学園を休むわけにはいかない、俺は鳴り出した目覚まし時計をすばやく止め学園へと向かうのだった。

「おはようケンちゃん!!」

いきなりの登場で俺は腰が抜けるかと思ったよ。何でこいつはこうも声大きい、近所迷惑だろうが。俺が今驚いているのは鳴海が大きな声を張り上げて俺に抱きつく一般にタックルというをしてきたからだ。俺は当然ダメージを受ける、そして鳴海がそんな俺の姿を見て喜ぶ、で今に至るわけだ

「な、鳴海い!!何しやがる!!」

「何って、スキンシップよスキンシップ」

「スキンシップで殺されてたまるか!!」

「よしじゃあ張りきって学園に行くわよ！」

無視ですか？俺のことは無視ですか？！

ふと見たコンビ二に写る俺の目に光る液体があったのは気のせいだったのだろうか……。

ところ変わって学園内の俺のクラス、鳴海も同じクラスだがすぐにクラスのものにさらわれていった。以外や以外にも、学園内にいるほうが俺は平和である。

「あの」

俺の横を通り過ぎようとした少女の群れの中で、リーダーらしき少女が声をかけてきた。

「浅野君、ほんどう 本堂 つかさ 司君知らない？」

突然の質問、しかしこれは今日だけでも数え切れないほど受けている質問だ。俺は今日も数え切れないくらい言ってきた台詞をはく

「知らないな。でも、たしかあっちの方に行ったよ」

と後ろのドアを指す。

「ありがとう、みんな行くよ」

ドドドドドと聞こええきそうなほど長い列を作り、彼女たちは去っていった。

「ありがとう、助かったよ」

俺の隣の席あたりから声が聞こえる

「どういたしまして、司君でいいんだっけ」

皆さんがお察しのとおりこの俺の目の前にいる少年こそが本堂司、このクラス（学園中）の女子のアイドルになった張本人。

「司でいいよ、オレも健一って呼ぶから」

気さくな性格で勉強はできないが魔法とスポーツなら大得意の美男子だ、そのせいで日々女子たちに追いつけ回されている。ついでに言うところ、こいつもエクソシストの仲間だったりする、得意魔法は雷で模擬戦でもシンや鳴海、美琴に引けをとらないくらい強かった。

「毎度毎度悪いな、ストレスしてるとはいえこの教室にいる間ずっとかけとくわけにもいかないし、ほんと助かってるよ」

司がいうストレスとは、自分の姿を隠す魔法で、上級者になれば匂いや気配まで消せる。俺も使えるぞ。

「俺がいなかったらいなかったでずっとストレスしてるだろう」

「あれ、気づいてたんだ。オレ、ストレスには結構自身あったのに、健一は探查系の魔法が得意なの？」

「そんなところだ。司も俺とシンの試合見たろ、俺はあまり攻撃型は向いてない」

そんなのはうそだ、何より壊すのが得意な俺が壊せないと言っている、なんか自分で言ってる笑いそうになった、でもそこはぐっと抑えた。その後俺は司とつまらない話をしてからそれぞれ帰っていったのだ。

『それから』の章々新しい友達々（後書き）

遅くなつてすいません。三日に一つといいながら一週間に一回ですいません。

『俺が人質!!』く前振り・・・的なゝ(前書き)

前振りみたいなものです

『俺が人質！！』く前振り・・・的なく

その日の帰り道

「ケンちゃん、こいつ誰？」

鳴海は今日知り合った本堂司を指差していった。朝はそうでもなかったが鳴海がどことなく不機嫌だ。

今日知ったことなのだが司も同じ寮の生徒だったらしい、それも鳴海の部屋の隣だった、世界は狭いな・・・。俺は今日の出来事を鳴海に話して司を紹介した。鳴海はさらに不機嫌になった、ていうか鳴海は司のこと知ってるはずなのに何でわざわざ聞いてきたんだ。俺は思考をめぐらせて見た。

「そうか」

俺は思い出した。そういえば、本部の中でも鳴海と司は犬猿の仲だ。って有名だったな、そのせいか。

「な、鳴海い」

後ろから声がかかる、俺たちはきれいにそろって後ろを振り向いた。そこにいたのは美琴だった、今日は居眠りをしてしまったらしく髪が少し立っていた。

「美琴、どうしたの？」

「えっとね、鳴海が司君とでてくのが見えて、心配で」

どうやら美琴は鳴海のことを心配でついてきたらしい、俺的には助かるが余計なものもつれてる

「美琴、鳴海と司が問題を起こすのは困るけど、だからって僕を連れてくることないじゃないか」

「ごめんねシン君」

「美琴は気にしないでいいんだよ、悪いのシンだから」

「鳴海い」

「それはどういことだ鳴海!!」

また始まった。何で仲良くできないのだろうか。俺あさのけんいちを鳴海がシンと美琴に紹介したときも喧嘩してたし。

「おい健一、こいつらいつもああなの？」

俺は軽く頷く、すると司は興味深そうに3人を観察して微笑んでい
る。何が面白いのだろうか?というかこの3人と一緒になるとろく
でもないことが起こりそうだ、なんだかやな予感がする。

「そういえばケンちゃん、今日って銀行に行く日じゃない」

「あっ」

そういえば今日は食費を取りに行く日だ。ちなみにだが、お金はお
ふくろたちから送られてくる。毎回とんでもない額を贈ってくるか
らそのうち家がつぶれるのではないかと気が気でない。といっても

詳しくは知らないが、家は結構有名な財閥だったりする。
そんなわけで俺は銀行に来たわけだが・・・

「何でお前らも来てんだよ!!」

「いいじゃない、別に」

鳴海が答える。まあ別にみんながいてもいいが・・・

そんなこんなで俺はの番号は44ばん・・・・・・・・不吉だ、な
んか起こりそうな気がする。

その悪い予感が見事に当たることなんてこのときの俺たちは考えも
しなかった。

『俺が人質!!』く前振り・・・的なく(後書き)

体調が少し悪いので次は遅れるかもです。
ご意見・感想おまちしています。

『俺が人質!!』く不幸だあああ……えっパクリ? (前書き)

ちよつと短いです。

『俺が人質！！』不幸だああ・・・えっパクリ？』

「動くな！！」

突然だが俺は今人質にされている。どうやら俺の悪い予感は見事に的中したようだ、俺たちが銀行に入ってから約20分、俺たちはたわいもない話で盛り上がったいたやさき、事件は起きた。

俺の隣にいた20代と思われる男たちの集団が突然立ち上がり、隣に居た俺は運悪く人質にされてしまった訳だ。

「動けばこいつを打つ！！」

リーダーらしき男が拳銃を俺に向けながら怒鳴り、周りの仲間にか合図を送った、その合図に築いた仲間はおもむろに自分たちが腰に巻いていた袋から何かを取り出した。

そして取り出したなにかを銀行内にいた人間すべてに取り付けたのだ。もちろん俺にも

「山田さん、終わりました」

取り付け終わると、リーダーらしき男、山田というらしいが山田に報告をする

「ご苦労。

おまえらよく聞け！！今お前らにつけたのは『ロッキングシルバー』これでお前らは魔法は使えない、おとなしく俺たちの指示に従ってもらおう」

どうやら今取り付けたのはロックリングシルバーらしい、でもよくこんな数のリングを集めたものだ、これ結構高いのに。
そのとき俺は不意に疑問に思った。

「すみません」

「何だ」

俺は俺を捕らえている山田に声をかけた。それに対し山田は不機嫌そうにまゆをまげ拳銃を突きつけた。その様子を見ていた鳴海たちはバ力を見る目で俺を見ていた、鳴海なんて今にも飛び掛りそうな勢いだっただ、しかしロックリングシルバーの効果で魔法が使えない今、飛び出すことがどれだけ無謀か鳴海でもわかっている、だから必死に飛び出したい思いを抑えて唇を噛む。

「あなたたちの目的は何ですか？お金じゃないんでしょ？」

その言葉に山田は感心したようで、興味深そうに俺の顔を見る、もちろんこの間も鳴海たちは動かない、いや動けない。自分たちが動くことで俺に危害が加わるかもしれない、だから動けない。

「おもしれえガキだ。何でそう思う」

山田は俺の顎に拳銃を突きつけながら言った。ていうかなんで俺の顔の角度を合わせるの？きもいんですけど。

「簡単ですよ、だってあなた方實際金に困ってないでしょ」

「なに？」

「ロッキングはかなり高価なものだ。一つ買っただけなら何とかなるかもしれないがこの数をそろえるにはこんな銀行じゃ足りなすぎる、逆に損をするね、よってあなた方の目的が金じゃないとわかったんですよ」

山田はしばらく黙って俺を見つめていた。俺にそんな趣味はないよ。

「ふ、ふははははは！おもしろい、おもしろいよ。そうさ俺たちの目的は金じゃない」

山田はしばらく笑いふけていたが、突然冷たい顔になった。

「俺たちの目的は殺しだよ、コ、ロ、シ。」

「殺しだつて？」

山田の言葉に銀行内の人間が息を飲んだ。殺される、そう思ったのだろう。

「そう、ここで一番殺しがいがある奴を見つけて、そいつを殺して持ち帰る。それが俺たちの目的だ！！」

山田は狂ったように叫ぶ、そしてうれしそうな表情で銀行内を見渡した。

銀行内の人々は山田の視線が恐いのか目を伏せている、ある4人を除いて。

もちろん鳴海たちだ、鳴海たちは心配そうに俺を見る、俺は軽くウインクを返すが鳴海に睨まれた。一方シンは「うえ〜」と愚痴をこぼし、司と美琴は困惑している。ちなみにさつきから美琴が俺を呼

んでいるのだが（アツ君）今行くわけには行かない。後でいろいろ言われそう。

「なるほど、殺しですか。」

ちなみに今の一番の候補は？」

「もちろん君だよ。ほんとにおもしろくて……殺しがいいありそうだ」

「ふざけないで!!」

そのとき突然鳴海が怒鳴り声を上げた。もう我慢の限界だったようだ。

「黙って聞いてればあなたたちは人の命を何だと思ってるの!!」

『俺が人質!!』く不幸だあああ・・・えっパクリ??(後書き)

ご意見・感想ついでにサブタイトルお待ちしております。

『俺が人質!!』くゲームく(前書き)

短いです

『俺が人質！！』くゲームく

「気の強いお嬢さんだね、でも君は引つ込んでてくれないかな」

山田はかなり不機嫌だ、やめる鳴海、今のお前じゃ叶わない。俺がどんなに心の中で忠告しても聞くはずはない、直接言っても聞かないのだから。

「あんたの言いなりになってたまるもんですか！！質問に答えなさいよ！！人の命・・・なんだと思ってるの！！」

こいつはどこまでバカなのでしょう？俺がせつかくこいつらの注意を引き付けていたのに、余計なことをしやがった。仕事が増えたよ・・・。

「おもちゃ」

そんな俺の思考の最中、どうやら山田が鳴海の質問に答えたらしい、でもそれはさらに鳴海をイラつかせる返答だった。

「おもちゃ・・・」

「そうおもちゃ、使いきりの、いくらでも湧き出るおもちゃだよ。」

「あんた本気で」

「本気も本気、まさに命こそが理想のおもちゃだよ」

山田はまた笑い出した、手を大きく広げ高く笑う、仲間と思わしき

男10名も一緒になって笑っている、はつきり言つと気色悪い、どつかのアニメで『あはは』『えへへ』と笑うのよりも気色悪い、もうやめてほしいね。

でも今の状況はちよつとまずいかな、おそらく山田はそろそろ鳴海を目障りだと思つてくるはずだ、このままでは鳴海やほかのみんなの命が危ない……。俺は何を考えてる、別にこいつらが死んでもいいんじゃないか？逆にせいせいするじゃないか。なのに俺は何で助けようなんて考えてるのだろう？

俺は銀行の天井を見る。白い……。俺は償いたいのかな？時折考えてしまう、考えまいと思つても思い出してしまう、何で俺はここにいる、そんな資格はないのに俺がいるからみんな不幸になるんじゃないのだろうか？彼女だって、結局は俺の我がままのせいで呪縛から逃れられなくなっているじゃないか。

『パン！！』

それは突然だった。山田が拳銃を撃つた、何の前触れもなく、無表情で無機質に淡々と。

俺は驚いた、鳴海が打たれたのかと思つた。でも実際は鳴海的首あたりをすり抜けただけ、少し髪が切れたがそれほどでもない。しかし、山田の目は本気だった、次は当てる。そんな決意のある目だった。

「お嬢さん……。もう死んでよ……」

「ひっ！！」

鳴海は動けない、腰が抜け一步も動けない。鳴海はこんなにも弱い少女だっただろうか？いつも活発で、俺のことすぐ殴つて、でもみんなにはモテモテで、それで……。それで……。

見捨てることできるのか？

助けられる、俺なら助けられる・・・

彼女を助けられなかったとしても、今日の前にある助けられる命まで、見捨てていいわけじゃない。

もしかしたらただ罪を償いたいだけなのかもしれない、でも、それでもこの目の前の命を救えるのなら・・・

「山田さん、待ってください」

「なんだ？小僧」

そうとう頭にきてるなこれは、本当に余計な仕事が増えた、今度飯でも奢ってもらおうとするか。

「そんな奴相手にするより俺とゲームをしないかい？」

これはおそらく危険なゲームになる、命ではなく、『浅野健一』、彼の存在をかけたゲームに・・・。

『俺が人質!!』くゲームく（後書き）

次から始まる『ゲーム』、いったいどんなゲームか期待しててください。

ただの感想でもいいのでお待ちしています。

『俺が人質!!』くルールく（前書き）

すいません。嘘つきました、ゲームの本格始動は次です。

『俺が人質!!』ルール

「ゲーム？」

鳴海やほかの人たちを助けるために、俺が選んだ選択、それはこの男と『ゲーム』をすることだった。

「そうゲーム」

「……いいだろう、そのゲーム受けてたっ」

山田は軽く苦笑し、鳴海に向けていた銃口を下げる。

「それで、ルールは？」

「ルールは簡単、あんたが俺を打っていき、1回ごとに一人人質を解放する。俺が途中で死んだ時点で負け、ここにいる人質を好きにすればいい、全員解放できたら俺だけ連れて行け」

はつきり言っただ俺は確実に勝てる、俺は……悪魔だから。

「……」

山田は目を瞑りしばらく考えている。でもこいつはOKするはずだ、なぜならこいつの目的は俺だ、必ず条件を飲むはずだ。……
・しかし、このゲームにはひとつとても大きな問題がある。
それは、このゲームで『人間』の限界を超えた姿を、誰かに見られ

れば、俺が悪魔だとされる可能性がある。だから人質を救い次第、見つからずに病院にいく必要がある。

「いいだろう」

「や、山田さん！！こんなガキの言うことを聞くんですか！！」

山田は俺のゲームを受けた、当然抗議の声もあったが、山田が睨むと黙った。でも黙らない奴らもいる

「まっ、まってよ！！どうしてそうなるの！！」

「そうです！何で健一さんが！！」

鳴海と美琴がなんかほざいてるが、無視する。しかし心配はいらなかったようだ、シンと司が2人を抑えてくれたらしい。そのときに司が『信じてると』言ってくれた、俺も期待に答えなくてはいけないみたいだ。

「山田さん、そろそろ野次馬が増えてきたし、ゲームを始めよう」

さっきから周りが騒がしい、おそらくこの異常事態に気づき始めたようだ、さっさと始めるか。

『俺が人質!!』ルルル（後書き）

ここしばらく短いですね、次こそ頑張ります。
ご意見・感想・その他なんでもいいので待っています。

『俺が人質!!』・・・・・・・・・・（前書き）

すいません。長い文にしようと思ったら、4回も間違って消してしまい、創作意欲を失ってしまいました。

『俺が人質!!』・・・・・・・・・・

山田の銃口が、俺の頭を狙っている。

「次はどこがいい？」

俺の体には、7つの穴が開いている。両手首に両足首、腹に3つつ。すでに死んでもおかしくないくらい、血が流れている。山田は、俺が思っていたよりも頭がいい、確実に急所をはずしている、それでも普通の人間がここまで耐えられるかどうかは微妙なところだ。人質は27人だった。すでにあの4人は逃がしてある、恐らくもう管理局に電話したのではないだろうか？別にそんなことをしなくてもいいのに・・・・・・・・。

「肩・・・・いつてみようか？」

俺の右肩に銃口が、突きつけられる。

バンッ！

「っ!!！」

こいつ、俺のこと人間だと思っているのか？恐らく思っていないんだろう、恐らく玩具くらいにしか・・・・。

また、俺の体から血液が吹き出る。もうすでにフロアの5分の1は真っ赤に染まっている。人質は俺を見ないようにしている、当たり前だ、こんな姿、自分でも見たくねえし。

「はあ……はあ……っ……はあ……はあ……はあ……
……はあ……」

息が荒くなる、一応死ななくても、痛いものは痛い、何度叫びそうになったことか。でも、それは俺のプライドがゆるさねえ、こんな奴を喜ばせるなんて、まっぴらごめんだ。

『犯人に告ぐ！今すぐ出て来い！！』

おや？もう来たみたいだ、行動が早いこと、まあ、重量な戦力（美琴たち）の問題だ、のろのろしていたら、首にされかねないからな。

「意外と早かったな」

山田は窓の外を見ながらつぶやいた、外では、こちらに銃口を向けて待機している。完全に包囲された。

一方山田はあわてたようすもなく、淡々と言い放った。

「そろそろ終わりにしようか」

く美琴く

今私は、銀行の前で待機しています。ただ待機していてもだめだと思ひ、さっきからアツ君をよんでいるのに、返事がきません。どうしてでしょうか？

いつも頼りになるアツ君、よんだらいつも来てくれるのに、どうして今日に限って来てくれないのだろう。

浅野君は、私たちのために傷ついているのに、通報することしかで

きないなんて。

「どうして」

そう思うと、無性に悲しくなってきました、悔しくなってきました。そのうち、熱いものがあふれてきて、頬に涙が伝いました。

「美琴、泣かないで」

すると、ふいに抱きすくめられました。その手は、とても細くて、泣かないでといってる割には、彼女もいまにも泣きそうな顔をしている。

「鳴海……」

『犯人に告ぐ！今すぐ出て来い！！』

管理局員の声が聞こえた、どうやら包囲が終わったらしい。でも、これでいいのだろうか？何かいやな予感がする、とてもいやな予感が……。

バンッ！……バンッ！バンッ！バンッ！バ……

そのとき、銀行内から20回の銃声が鳴り響いた。

『俺が人質!!』・・・・・・・・・・（後書き）

これからは、大丈夫・・・・・・・・なはずです・・・・。
ご意見・感想お待ちしております。

『俺が人質!!』く俺の中の俺く（前書き）

はい!この話重要です!

『俺が人質！！』俺の中の俺

く山田く

面白いとこだったけど、結局は人間、20発の玉を全身に受けて簡単死んでしまう。なんて貧弱なのだろうか、この目の前で血だらけの男を蹴りながら思う。

そんな人間とは違い、あのお方はどうだろうか、私はあのお方に傷をつけることもできなかった、まさに神のようなお方だった。あのお方の完全復活のためならどんな手段だって使う、生贄は多いほうがいい。

「あれ？死んじゃったね、どうやら勝負は私の勝ちですね。約束どおり、皆殺しにしましょう」

私は部下に指示をだす、これでいい、本当はこの少年をあの人前で殺すつもりだったが、まあどちらでも同じだ。そんなとき、私の額から汗が流れ落ちた。

「おかしい」

そのとき射撃準備をしていた部下の一人が

「うぐあ」

という悲鳴を上げた、驚いてその部下の顔を見る、いや、見ようとした。

「ば、馬鹿な」

そこに部下の顔はなく、代わりに血しぶきが上がる。人質のものは悲鳴を上げた。しかし、何が起きたというのだ。

「俺の体に傷をつけるとは、いい度胸してるじゃねえか」

そこには、悪魔がいた。

く 健一 く

意識が戻る、しかし完全じゃない、頬に当たる地面が冷たい。血がうずく、壊したい、殺したい。

俺が俺じゃなくなる

『その感情にすべてを任せろ』

あいつの声がする、だめだ、抑えろ。

「皆殺しにしましょう」

皆殺し？何を言ってるんだよ、俺は立つよ、負けねえよ。

動け！動けよ！くそ！……仕方……ない。

俺は、自分を手放した。

『俺が人質!!』く俺の中の俺く（後書き）

ご意見・感想お待ちしています。
ちなみにアイデアも

『俺が人質!!』くああ、気分がいいく（前書き）

グロテスクなので、苦手な方は遠慮したほうがいいです。

『俺が人質!!』くああ、気分がいいく

く健一く

ああ、気分がいい。欲望に任せて、手始めに一番弱そうな奴の首を『ウォール』で吹き飛ばした。

ああ、俺は馬鹿だったんだろうか?こんな気持ちのいいことを否定していたなんて、残り30人、でも殺していいのは10人。物足りないなあ、もつと殺したいなあ、ああ・・・魔王の血が騒ぐ・・・。

「俺の体に傷をつけるとは、いい度胸してるじゃねえか」

その言葉で、その場の空気が凍った。この場の者の瞳に移るのは『恐怖』の一色だった。人質も含めて。

「い、いやだああ!」

どうやら一人逃げ出そうとしているみたいだ、それにつられて、『何でリングが利かないんだ』『こんなのでたらめだ!』『死にたくない!』なんていう奴が出てきた。

そんなことさせるわけないのに、馬鹿な奴らだ。俺は出口に向かう者に走りよりまず一人の頭をつかむ

「い、いやだあ、死にたくない!」

そんな言葉聞こえないね、それとも喜んでるのかなあ、しょうがない奴だな。自分の手に魔力をためる、ホントに人間の魔力は不便だ、呪文が無くては発動しないし、こんなロッキング程度で魔法が使えなくなる

「こんなもの、砕いてしまおう」

周りのものは言葉の意味がわからない、山田でさえも身動きひとつせずに、哀れな男を見ている。

『パリン』

はじめは何の音かわからなかったようだが、俺の足元に落ちたものを見る。

『ロッキングシルバー』

魔法を使えなくするための道具、本来それは、人間にとっては絶大な物。でもそれは、人間にだ、俺は違う、俺は………悪魔だ。

「さようなら」

そう言つて、手の中のもうひとつの魔力を、一気に手のひらの中に凝縮させる。その俺の手の内にあった男の頭は跡形も無かった。その光景にみんなが吐き気を起こしただろう、かなりグロイ、目とかも跡形も無かったが、手加減がうまくできず、心臓あたりまでえぐったような光景だ、おまけに吹き飛んでしばらくはピクピクしてたし。その後ほかの逃亡者も風の魔法で、きれいに首を取った。

……ああ、本当に気分がいい。

「何だ君は、どうなっているんだよ！死んだはずだろ！なんだよ、

何だよ何だよ！」

山田が飛び掛つきた、それとともに残りの4人も飛び込んでくる、山田は拳銃で、ほかのものはどこから出したかわからない刀を振り回してくる。

「このつ死ねっ当たれええ！」

何人もかかってくるが、避ける、避ける、避ける避ける避ける避ける。

その間に山田の射撃もとまらない、それも当たらない。そのとき真正面から切りかかってくる馬鹿を見つけた、俺はそいつの刀を指で挟みそのまま引く。自然と男もついてきた、まるで釣りだな。そして横から来る攻撃、俺は挟んだ刀を斜めにずらし横から来る刀を滑らせた。刃はきれいに滑り、刀を少し上げ持っている手から外させる、そのまま男の顔面の横に突き刺すようにする、実際に刺す訳ではない、しかし滑らせている刃はどうだろう、混乱しているのもあって、その勢いを止めることは不可能だ。そのまま刃は滑りやがて・
・
・
・

「あつ・・・」

最期の声にしては呆気なかったな。はじめに攻撃してきた男は、きれいに口から上が落ちた。きつた方も混乱してる。そこに持っていた剣の手元を重りにしてもう一人の男の方へ、半端ない遠心力で振る。今度は足と胴体がオサラバした。残り3人。

山田の拳銃から玉が飛ぶ、丁度2つ。その向きを魔力で曲げおまけに爆破機能もつける。残り2人の中にめり込んだ玉は、俺の指の音で爆破された。まさにコッパミジン。エグイねえ。

「最後はあんただ」

俺は山田に近づく、一步、また一步と。山田の顔には、もうはじめの余裕は見られない、その目はもう戦闘をするものの目ではなかった。

そんな山田に俺は奪った刀を上げる、最後に山田は何かを呟いた。

『グチャ』

山田を殺した後、すぐに管理局のものがなだれ込んできた。そこには、意識を失った人質と、傷だらけで、血だらけの少年が立っていた。

『俺が人質!!』くああ、気分がいいく（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。

『路地裏の出会い』くっついて・・・定番だよね（前書き）

新しいキャラ出ます。（ヒロイン候補）

『路地裏の出会い』くっくって……定番だよ〜

く健く

やべえ、やべえよ。つつい逃げちまった、まるで俺がなんか悪いことしたみたいじゃねえかよ。俺の馬鹿！！大馬鹿！！

鳴海の声を聞いて振り向こうとしたら、自分の状況見て、そんで混乱して逃げるなんて、馬鹿だ俺……とほほ……

「誰か！！」

おまけにこんな状況に陥るなんて、考えもして無かったよ。逃げてるときに人目を避けて路地裏とか通らなけりゃよかった。

いかにもヤのつく怖い人たちが、一人の少女を囲んでいる。もしかしたら俺って何かに取り付かれてるのかな？じゃなきゃ、この運の悪さを説明できない。眼鏡もどっかに落としたみたいだし、どうしようかなあ。

「放せ、聞こえないのか！！」

あゝ、意外と強気なお嬢さんのようだ、見た感じがわいよりかっこいい系の美少女だ。どうしよう、なんかこいつ助けたら、厄介なことになると、俺の第6感がいつてる、俺の平和な日々がなくなると訴えかけてくる。

おまけにこの怪我だ、今魔法使うとあいつが出てきちゃうし、こんなやつが助けに行ったら逆にいやな気がする、けど助けなかったらそれで目覚めが悪いし……。。。。。。。

仕方が無い、助けるか。

「おい」

俺はまず普通に声をかけてみた。

• • • • •
• • • • •
• • • • •

┐

└

返事ねえ、おまけに振り向いてすらいねえ。

今度は肩に手をかける……。払われた。

[illegible]

殺す

「そのクズ、振り向け」

ちよつと本気で怒ったよ俺、自分でも声が低いのがわかる。一方おじさん方は

「ああ!？」

この声ってヤクがつく人のきめ台詞かなんかなのだろうか?ていうかこつち向いたまま、何で固まってるの、後ろの少女も、俺助けに来たんですよ、なんか反応ないの、寂しいよ俺!？。

「お、お前大丈夫か？」

「大丈夫です」

怖いお兄さんが心配してくれた、この人だけは助けてあげよう、うん決めた。いやそれにしても、少女が反撃しないと思ったら、ロッキングかけられているのか。

「何だこのガキ、ここは俺たちの遊び場だからでってくれない？」

違うおじさんが言ってきた。

「それとも、このお嬢さんを助けに来たのかな？」

馬鹿にしてるよ、こいつ。殺す、必ず殺す。

「いや、ごみクズが固まってたから、掃除しようと思って。親切心

ですよ親切心」

「あなた……」

俺を見ている、今の俺決まってるのかな、そうなのかな。て、照れてなんか無いんだからね！！

「生意気なガキだな、その怪我で何ができるんだ」

めんどくさい、なんか話するのめんどくさい。

そう思った俺は、ぐ・う・ぜ・ん、持ってきてしまった山田の銃をおじさんたちに向ける。

「だめじゃないか、そんなおもちゃで遊んじゃ。危ないよ」

もしかして、偽者だと思ってるのかな？いや、なんか面白いね、本物なのに偽者と勘違いされてるのって、本当の事知ったとき、どんな反応するのか楽しみだ。もう少し遊ぼう。

「これは、本物ですよ？」

「何で疑問系なんだよ」

「いいから、さっさといきな」

おうおう、余裕だな、面白がってるよ。楽しいな……………
・俺ってSなのかな……………
もうそろそろいいかな。

「だから本物だって、どかないと怪我するよ」

「そうでちゅか？」

プチッ

俺警告したよね、そうだよ、怪我しても警告聞かなかったこいつらのせいだよ。

「俺は警告したからね」

「あ？」

銃口を下ろしていく。

「諦めたか」

そして・・・

パンツ！！

男の足を打った。

「いつてえ！」

「次はどこがいいかな！」

『パンツ！！』

今度はもう片方の足。男たちは少しずつ後退していく、そして最終的に、打たれたやつ以外の2人が汚したやつを担いで、めっちゃくち

やに誤りながら去っていった。

「行っちゃった」

俺はその姿を見送り、自分がものすごい怪我しているのを思い出した。早く病院に行こう。

そして俺は歩みを進めようとしたが、彼女がリングを付けっぱなしだということに気づく。丁度あいつも落ち着いたし、そろそろ魔法を使ってもいいだろう。俺は彼女のリングをつかむ。

「何をするつもり、このリングは、付けた者しかはずせない」

俺はそんな彼女を無視して作業を続ける。そして俺は彼女の耳元に顔を近づけてささやいた。

「これは秘密だからな」

カチンッ

彼女は顔を真っ赤にして、ボーとしていたが、われに返り俺の目を見た。

「これ・・・」

彼女は俺をずっと見ているが、この空気に耐え切れなかった俺は立ち上がる。どこか人氣が無いところで回復するか。思ったのだが

「あれ？」

視界がぐらぐらする、やばい、いきなり魔法を使ったせいで体が悲

鳴を上げたらしい。

意識が遠くなっていく、ホントに俺はついてない……。

『路地裏の出会い』〜こつて・・・定番だよ〜（後書き）

ヒロインの名前が決まらない。

ご意見・感想お待ちしております。

『路地裏の出会い』く俺の人間としてのファースト・・・く（前書き）

名前募集中。

『路地裏の出会い』く俺の人間としてのファースト・・・く

く健一く

「ん、んん」

俺が目を覚ますと、知らない天井・・・・・・・・すいません。白い天井が見えた。体には包帯が巻かれ節々が痛む。そして何より気になるのが、俺の右手をつかむ暖かい手。

間違いない、俺が気を失う前に助けた子だ。

「君は」

「あ、お、起きたのですか?!」

あれ?なんかさつき会ったときと印象違う気がする。

「さつきは、助けていただき、あ、ありがとうございます」

何だろう?何が違うんだろう?・・・・・・・・

「えつと・・・・・・・・その・・・・・・・・」

なんかモジモジと、変な仕草をはじめた。

わかった。こいつの違い、こいつ、さつきと比べてなんかやわらかいって言うか、とげが無いんだ。顔赤いし。

「お礼がしたいのですが……」

御礼をしてくれるらしい、でも別にいらないのにな……。

「いや別に……なんか、結果的に助けられたみたいですし」

おそらくこの子が、魔法かなんかで運んでくれたのだろう。ここはお礼をしておくべきだ。でも厄介だなあ、1度病院に来てしまったからには、怪我を目立たない程度に治すこともできない、怪我の具合がおかしいと、いろいろ調べられかねないからな。

「目を瞑ってもらっていいですか？」

「いいよ」

なんか反射的に閉じてしまった。でもなんだろう？お礼で目を瞑れて……それはいいとしても、こちらに向かうものすごい足音が聞こえる。

ドドドドドドッ

俺はいろいろ気になって………目を開けてしまった。

その瞬間開かれるドア。そして、唇にあたる柔らかい感触。目の前の少女の顔。

「す、すいません！部屋間違えました！」

入ってきたのは美琴だった。でも、なぜか俺だと気づかなかったみたい……眼鏡がないからか。

そんなことはどうでもいい！なにこの状況、さっき一瞬だけあつ

た感触って……。

「それでは失礼します!!!!」

「あ、あの」

名前聞こうとしたら行っちゃった……。

俺は眼鏡を魔法で出しかけた。丁度そのとき再びドアが開く、美琴が戻ってきたらしい。

「ここで間違えないはずなんですけど」

「よう」

俺は片手を上げる、なんだか鳴海の目が怖い。いやな予感がするのは、俺だけだろうか？ いや違う、今の鳴海は死神の目だ。

「あらあら、健ちゃん元気そうね」

笑ってるのに、何でこんなに怖いのだろうか？ なにこれ、前にもこんなことなかったっけ。

「銃声に驚いて中に入ったら、あんた血だらけ、周りも血だらけ、拳銃の果てにあなたは、逃げる。どんだけ心配したと思ってるの」

鳴海も心配するらしい、ぜんぜん平気だけどね、俺死なないもん。

「心配した罰にまず一発」

鳴海がにじり寄ってくる。

怖い、助かる気がしない。俺ががんばったのに！なんか理不尽だよ！！

「鳴海、だめだよ。浅野君はまだ怪我してるんだよ」

「……………美琴が女神に見える、きっと目の錯覚なんかじゃない、彼女は正真正銘の女神だ。」

「直ってからにしてね」

「……………前言撤回、彼女は悪魔です。」

それから、魔法治療や俺の回復力で、半年といわれたのを1ヶ月で治した。

そのあと鳴海にぼこぼこにされたのは、言うまでも無いだろう。

『路地裏の出会い』く俺の人間としてのファースト・・・く（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。

『路地裏の出会い』生徒会長

く健一

「いてて、もつと優しくしろよ」

鳴海の理不尽な暴力を受け、負傷した俺は司に手当てをしてもらっている。保健室でもいいのだが、あそこにはトラウマがある。

「で、健ちゃん本当に何も覚えてないの？」

さつき俺を散々殴っていた張本人が、事件の日何があったかしつこく聞いてくる。それというのも、俺がその場の人間の記憶をきれいに飛ばしたせいだ。おかげで事件の真相はわからずじまい、逃げ出した俺なら何か知っていると見たらいいのだが、俺が話すわけも無い。

「だから、何も覚えてないんだって」

しつこい、けど、強く言えない。怖いもの。

『ピンポンパンポン』

そんな時だった、あの放送が入ったのは。

『全校生徒にお伝えします。今から、講堂に集まってください。生徒会長から、大事なお話があります。繰り返します』

「何でしょうか？」

美琴が俺を見る、なぜ俺？どうせなら鳴海見る、鳴海を。

そんなこんなで講堂に向かう俺たち、しかしその間にも俺はいやな予感がして、行きたくなかった。しかし、怖くて断れない。ああ、無念。

講堂に着くと、ほぼ半分ほどの生徒が集まっていた。毎回思うのだが、この人数の生徒をどう正確に並べるのだろうか、絶対入れ替わっていても気づけないよ、普通の学校なら。でもここはそうも行かないみたいだ、生徒1人1人の場所に魔方阵が張ってある。一番手前のやつい入ると、自動的に自分の場所に行けるらしい。便利だ。俺が天界にいたところに、魔法が無い世界があつたが、この魔法をその世界の人々に教えてあげたいよ。

いつの間にかみんな来ていた、鳴海たちとは同じクラスだが、結構遠いな、まあその方が俺的に安全でいいのだが、できれば俺より前にしてほしい、後ろのほうだとなんか見張られてるみたいで怖いよ。

「皆さんこんにちは」

そんな視線に耐えて舞台の上を見る、そこには眼鏡さんがいました、書記かな？

「それでは、次に会長からの連絡です」

眼鏡さんはマイクを会長らしき人に渡す・・・・・・・・・・なんか見たことある。はじめは気づかなかったが、青い髪がきれいだな、目の青はもつと濃いや、ちょっと好みかも・・・・・・・・・・うつ後ろから殺気が・・・・・・・・・・。

「皆のもの！忙しい中よく集まってくれた、今回皆を集めたのは、

探してもらいたい人物がいるからだ!!」

あれ? 思い出してきたぞ、んんんん……ど、どこであった、
思い出せ……

『チユツ』

……
……知らない、俺は知らないあんなやつ、見たことも聞いたこともキスしたことも無い!! 赤の他人だ!!

「皆のもの、これを見てくれ」

そこで降りてくるスクリーン、どこから出てきたかは聞いたら負けだ。とにかく降りてきたスクリーンにある人物の寝顔が映し出された。

その瞬間、講堂中の女子が黄色い悲鳴を上げた、ちなみに後ろからの殺気が何倍にも膨れ上がった、もちろん鳴海の。

「この者は私の命の恩人だ、しかし、不覚ながら名前を聞きそびれてしまったのだ」

いや、あんたが勝手に去っていった気がするよ、俺なんか悪い人みたいじゃん。

「そこで、皆にこのものを探してもらうことにした、よろしく頼むぞ!」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

『イエッサアアア』

『必ず殺おおすつつつつううう』

・・・・・・・・鼓膜が破れる、すごい雄たけびだ、それに物騒なことを言っていたやつがいた気がする。

まあ、とにかくこのあと鳴海に呼び出されることだけは間違いない。

『路地裏の出会い』生徒会長より（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。

『路地裏の出会い』く見つけたく

く健く

「なんとしてでも！！この男を見つけ出せ！！」

響く怒声、俺はその声をスルー、もし今しゃべれば確実にやつにやられる、ここは耐える。

「説明してくれるかな健ちゃん」

怒気がこもった声で、俺の前に仁王立ちをしている鳴海を見上げる。俺のほう背が高いのに何で見上げるか、それは俺が正座をさせられてるからだ。おまけに廊下で。

あの生徒会長の写真で俺だとわかった鳴海を恨む、なんで何年も前に見たきりの俺の眼鏡ないバージョンの顔を覚えてるんだよ、そろそろ足痺れてきた。

「えっと、だから、く、」

それから鳴海の蹴りを入れられながら、生徒会長を助けたときのことを丁寧にした。てか痛かった、俺の脳が揺すられた。

「ていうか、もうけるのやめろ、俺が馬鹿になったらどうする」

「もともと空でしょうが！！」

また蹴られた。ていうか空は無いだろ、俺だって・・・

『もう、カイはもっと自分のこと考えて!!』

「・・・・・・・・」

何考えてるんだ俺は、もう忘れなくちゃいけないのに。最近よく昔のことを思い出す、何かの予兆だろうか、今の俺にはわからない。

「ちよつと！聞いてるの!!」

でも、今このときを大事にしたい、でも、俺にその資格は無い。悲しいことにな・・・。

「ごめん」

一人になりたい、どこかで、どこでもいい早く・・・一人に・・・。

「一人にしてくれ」

「あんたね・・・」

鳴海は俺にまだ何か言いたげだったが、俺はすぐにその場を去った。

く???く

あの方はどこの誰なのだろうか？解るのは、彼の着ていた制服が私の学園と同じものだということだけ、学園の生徒会長ともあるう私
が、名前を聞きそびれるなんて、こんな失敗をするなんて初めて。
それほどまでに、衝撃的だったのだ。

であった瞬間、雷に打たれたような衝撃が、私を襲った。はじめて
のことだった。これを恋というのだろうか、一目惚れと言うのだろうか、とにかく、私はその人を忘れることができなくなった。だから、探した、でも見つからない、学園中を探した、それでもだめだった、生徒にも呼びかけて探している、いつか見つけたい、彼を。

「あれ？開いてる」

気分転換に屋上に来た、いつもは鍵がかかっている屋上の鍵はなぜか開いていた、誰かいるのだろうか。慎重に扉を開ける。
しかし、そこにはだれも居なかった。

「もしかして」

私は、今出たドアを振り返り、地面を蹴った。私の体は簡単に持ち上がり、扉の分出っ張った地面の上に着地する。

そこには、一人の少年が居た、眼鏡をかけていて、これといった特徴は無い、あるとすれば、そのきれいな黒髪くらいだろうか。しかし、なぜか気になる。私は彼に近づき傍らに立つ。

見覚えがある、なぜかそう思った。気になって彼をジッと観察していた。

「あつ！」

私は彼の眼鏡に手をかける、そして、その眼鏡を起こさないように慎重に取り扱った。

ヴオオオオオオ

一厘の風が吹いた。私は、また眼鏡を彼にかける。

やっと見つけた。

その次の日、私は、早くも彼の搜索を中断させた。

出会いとは必然なのだ（前書き）

お久しぶりです。最近ようやくスランプから立ち直りました。更新遅れてすいません。これからもっと頑張るので、どうか見守っていただきます。

出会いとは必然なのだ

生徒会長の『謎の生徒搜索命令』は、次の日に取り止めになった。生徒会長は「みんなに迷惑をかけた」と謝っていた。それでも暑苦しい男どもや、ちよつとあれな女子の雄たけびが上がるのだからすごい。

「司、生徒会長ってそんなに凄いのか？」

「それはそうd「それはそうだろ!!」……………」

俺の質問に答えようとした司を張り倒し、シンがオレとキスしてしまうのでないかと思うくらい、顔を接近させてきた。もし相手が女の子だったのなら、とてもうれしいはずの状況だが、残念ながら相手はシン、正真証明の男だ。嬉しいはずもない。

「彼女は、『この僕』を差し置いて、1年で生徒会長に上り詰めた女性だよ。そして、僕の婚約者候補でもあるのだよ。なぜなら!!この僕にふさわしい女性など、早々いないからね!!」

…………何というのだろうか？率直に感想を述べるのなら、めんどくさいだろう。非常に厄介だ。その後も、永遠に続くのではないか？と思うくらいシンが話し続けた。途中からもうシンの自慢話だった。というか、シンの下で痙攣している司は、助けたほうがいいのだろうか。別に助けてもいいのだが、今話しかけたところで、退くことはおろか、俺の声さえ聞こえないと思う。あつ、泡吹いてる…………。

しかし、そんな俺の心配は、俺の体に抱きついてきた存在により、無駄に終わった。というか、ほとんどタツクルだ、痛い、地味に痛

い。

健一は10ダメージを受けた

見たいな感じた。

そして、俺にダメージを与えた張本人を見た俺は硬直し、同時にシンも話すのをやめた。

ははは、ジョウダンデスヨネ。

何だろう？俺って本当に呪われてるのかな？お払い受けるべきかな？今日の晩飯何にしようかな？

今晚のメニューを決めよう、そうだな・・・たしかジャガイモとたまねぎに豚肉はあつたはずだ。この材料ならカレーかな？でもニンジンがない・・・まあいいか、特別食べたいわけでもないし、肉も豚肉だし。

カレーに決定！！！！

パチパチ！！！！！！！！！！

・・・・・・・現実逃避終了・・・・・・・

「浅野 健一！」

聞きなれない、といつても今朝聞いたばかりの声にわれに返る。とてもきれいな声だ、そんなことを考えることにした。しかし、いつか現実を見なくてはいけないわけで、俺は硬直したシンを見る。

完全にいつてしまっている。ためしに手をかざすが、反応なし。これ重症だ、早く何とかしなければ。俺はシンに近づこうとするが、強い力で抑えられる。

。 これ以上の現実逃避は許されないようだ

「何用ですか？『生徒会長』」

俺の体をガツチリ羽交い絞めにしていた犯人を見る。

気づいていた、気づいていたともさ、この人が俺に攻撃した犯人だって、でもね、認めたくないじゃないか、この平和を愛するこの俺が、なぜこんな問題の種のような人物に突然抱き疲れなくてはいいけないのだろうか。というか、なぜに俺の周りには問題の種のような人物が続々と、集まるのだろうか。きっとそれは聞いちゃいけないんだろうな 思わず遠い目になる俺、そしてそんな俺に襲いかかろうとする影。その影からの攻撃をかわす俺。

「 チッ」

舌打ちをするシン。

しばしの沈黙の後、口を開いたのは俺のほうだった。

「何のつもりですか？」

またも沈黙。重い空気が俺のネガティブハートを締め付ける。その間に、問題の彼女は俺に体をさらに密着させる。痺れをきらせたのかシンが俺を見据えて言葉を出した。

「どういうことかな健一君」

「どういうことでしょう・・・シンさん」

つい敬語になってしまふ俺。でもしょうがないじゃないか、怖いんだよ、目が！なんか死んでるんだよ、目だけ死んでるんだよ、なんかゾンビみたいなんだよ。というか、俺の腕についてる奴、すりすりしないでくれ！！俺も一応男なのだ、その、一応女性にこんな風に密着されると、ドキドキしてしまふですよ、ええ、ドキドキしてしまうのです。ここ、大事なところだから覚えておくように。俺は彼女を見て聞いてみる。

「あの、俺に何用ですか？」

「ああ、わたしは 未来恵 一応この学園の生徒会長をやっている。みんなからは生徒会長と呼ばれているからそれでもいいが・・・」

「

彼女は少し言葉をにこらせて

「お、おまえには、め、め、め、恵と呼んでほしい」

顔を真っ赤にしていわれた言葉。

この子も真っ赤になるスキルを持っているのだろうか？それとも、赤くならないほうが異常なのではないだろうか？

でも、せっかくの申し出なので、そう呼ぶことにした俺だった。

「な！！恵だつて！！」

シンは「僕でさえまだ呼び捨てにしていけないのに」と落ち込み始めた。本当にめんどくさい、さっきよりもパワーアップした。

さすがにめんどくさくなってきた俺は、シンを気絶させた。なあに、ちよつと首を絞めただけさ」

この後、シンの記憶を消し、俺は生徒会長と二人きりで話せるように学園を出た。

出会いとは必然なのだ（後書き）

久しぶりの登校でしたが、いきなりアンケートをとりたいと思います。

- 1 ・皆さんのお気に入りのキャラクターは？
- 2 ・何か、こんなキャラクターがほしい
- 3 ・こんな敵キャラほしい
- 4 ・その他、作品に対しての意見

この四つの内、ひとつでもいいので意見をください。今後、このアンケートしだいで物語が変わっていくので。

他にもご意見・感想もお待ちしております。

『変態』（前書き）

長らくお待ちしました。

『変態』

「健一」

俺は今とある喫茶店にいる。この学園では結構有名で『テンビン』という。ちなみに俺はお得意様だＺＥ

「で、何で生徒会長はいきなり俺に襲い掛かったんですか？」

「・・・」

「いい加減にしてください」

「・・・」

「何で生徒会長は俺に襲い掛かった？」

「・・・」

なんだろう？さっきからこの会話を何度繰り返したことが生徒会長は、一言も答えてくれない。俺が何か悪い子としたのかな、そうなのかな？

オレが悪戦苦闘していると、生徒会長がポツリとつぶやいた。

「・・・恵」

恵？これは名前で呼べということなのだろうか。いやしかし、俺はただの生徒に過ぎん。生徒会長ともあるうお方に、名前で呼ぶなんてことをしてもいいのだろうか。現に、俺は今、ただならぬ殺気を

感じている。おいそこの親父、ハンカチを噛んで「キイイイ」って言うのやめろ、キモいから。

物は試しというが、今この状況で俺が生徒会長を呼び捨てにしたら、きつと生命の危機だと思う。しかし、言わなくては話が進まない。

[illegible]

「未来先輩」

•
•
•
•
•

おっ俺を見るなあああ！！へタレとか思うな！！あくまでこれは頭脳プレイであって、後のことが怖かったわけじゃない！！

• • • • •

生徒会長こと、未来先輩はそれでもなお俺を見つめ続ける。そして徐々にその目尻に光るものを溢れさせた。

えっ？もしかしてさっきよりもまずい感じ？

「あつ……えと……未来先輩？」

「惠」

「あの」

「恵」

俺は未来先輩に、睨まれる。しかし怖いほどではない、むしろ可愛・
・・ゴホン。ええ、とにかくピンチだ。周りの殺気が五割ほど増
した。このままだと本当に殺される。ゆえに、今ここでこの困った
人を何とかしなくては、しかし、泣き止ませる手段は一つしかなか
った。

「め……め………倦怠子食べる」

ビシッと親指を立てるが効果なし、逆に目尻にあった光るものが、溢れんばかりに溜まっていった。もう諦めるしかないか。

「め・・・めぐ」あらあら、健一君発見♪」

突然後方から、鼻声混じりの気色悪い声がした。俺はゆっくりと振り返り、後悔した。

見なければよかった

٧٠

俺がそこで見たものは、顔に濃すぎる化粧をし、金髪の髪をかぶり、真つ赤なドレスを着こなす、ひげを生やしたおっさんだった。何これ、今俺が呼ばれたと思ったのは気のせいですよ、誰かそういつてください、俺はこんな人知りません。知ってたとしても、きっと記憶から消し去っています。

「健一君……あれ彼女」

何を言い出すんじゃ己は、俺がこんなやつと付き合うとも思っているのか！？俺の人を見る目はそんなもんだと言いたいのか？！

「断じて違う！！」

「あらあ、けんちゃんったらっ・め・た・い」

彼はそれから俺に向けウィンクをした、何でだろう、俺にはかびて変色したハートがふらふらとこっちに近づいてくる気がする。

俺はそれを魔法で誰もいない方向に飛ばした。ハート（自称）はそのままテーブルに当たり

『キリキリリリリ……』

「……」（俺）

『……』（その他の人々）

今俺は恐ろしいものを見ている、さっきテーブルに突撃した自称ハート。なんと、テーブルに当たった瞬間、テーブルを圧縮し、最終的には周りの空間ごと吸収してしまったのだ。その光景に、一同は黙り込むしかなく、そんな恐ろしいものを放った張本人といえば・

「もお、けんちゃん避けたらだめよ」

と、くねくねしていた。と、鳥肌が！！

俺は硬直していた。だがその間に店のものはみんな逃げたらしい。・

・て、あれ？なんでまだ未来先輩がいるんだ。

「健一は渡しません」

あれえいつの間に俺は呼び捨てされるような関係になったんだろうか。そんなことよりも、ようやく事の重大さが解ってきた。それは、こいつが俺を殺しにいたということだ。身に覚えが無いといったら嘘になるが、どっちにしるこれから何かが起こるのは確実だ。俺はゆっくりと構えを取り、魔法を発動させようとする。しかしその前に、変態が

「あらやだ、今回は軽い挨拶よ。今回はここまで。でも健ちゃん、忘れちゃだめよ、自分のこと。あの方は、あなたの存在を欲しているわ。近いうちにまた会うかもね。それじゃ」

そういつて変態は煙のように消えた。

『変態』（後書き）

ああ、自分に感想という名の力をください。

『されど運命は回る』（前書き）

遅れました。

『されど運命は回る』

「健一」

嵐の後の静けさ、という言葉を知っているだろうか。まあ、祭りの後の静かさとそう変わりない意味だと思う。

あの変態事件《思い出したくもない》のあと、一段落できると思った俺だが、そんな時間は俺には無かった。生徒会長のこともそうだが、事件があつたことで誰が通報したかはわからないが舞香がやってきてしまった。当然『健一』で、会うのは初めてだが、鳴海たちとよくいるため、知らないわけでもないようだ。今は舞香の事情聴取を受けている。出会ってはじめてに説教をされた。やれ、なぜ逃げなかった、やれ、あなたは馬鹿なのか。もう、散々言われた。そして一時間近くの説教のあと、ようやく本当の事情聴取が始まった。

「名前は」

「浅野健一」

「何でここにいた」

「その、生徒会長にお話があつて」

「生徒会長……」

舞香はオレを、まるで親の敵のような目で見た。あれは、視線で人を殺せる。

そのときの舞香の心境といえば、鳴海たちがいながら、まだ物足りんかというところだった。ここで、舞香にとっての健一の株が下が

ったのは言うまでもないだろう。実際、舞香の目からは、そんなオラも出ていた。本当はいろいろ気になるオレだったが、これ以上生徒会長に肩入れすると、夜道が歩けなくなる気がしたので、もう追求するのはやめにした。

それから二時間みっちり質問攻めされて、俺は解放された。

「災難だった」

何でだろう？平和を愛するこのオレは、いつも厄介ごとに巻き込まれる。今日だって、あんな変態に襲われたし。
しかし気になる、

「あらやだ、今回は軽い挨拶よ。今回はここまで。でも健ちゃん、忘れちゃだめよ、自分のこと。あの方は、あなたの存在を欲しているわ。近いうちにまた会うかもね。それじゃ」

あの方って、だれだ？それに、自分のことを忘れるなとも……あいつ、いやあいつらはオレの正体を知っている？何者なんだ、一体。

もう頭の中はめちゃくちゃだ、家までの道のりが、こんなに長く感じるなんて、本当に重症だ。てか、忘れてた、今日大量の宿題が出てたんだ。ため息をつくオレ。明日までに宿題終わるのだろうか？終わらんないよな、やだなあ、怖いなあ、よりもよってカツアン（勝先生）からの宿題だ。

カツアンあのデカイ図体で、全力の拳骨を食らわしてくるからたまったもんじゃない。

帰り道は、どうしてこうも寂しいのだろう。さっきから誰ともすれ違わない、夜中にこんな街中を歩く俺のほぅが非常識なのだろうか。

街灯がつき始め、道を照らし始めたのは、もう、何時間も前のことだ。見れば街頭には、大量の虫がついている。

俺は、少し足を止めた。特に何か思ったわけではない、ただ止まりたかったのだ。

・・・今日だけで、どれだけ厄介ごとに巻き込まれただろう・・・

ふとそんなことを考えた。思い返せば、今日だけで、会長に襲われて変態にも襲われた。うじうじしていても仕方がないのだろう、でもあの変態だけは見逃せない。もしかしたら・・・・・・・・・・。

「それもまた運命か・・・」

俺はまた歩み始めた。

「お帰りッス」

俺はすばやくマンションに強化魔法をかけ・・・・・・・・ようとしたが、ピークイのすばやい蹴りによりそれは阻止された。

「何をするつもりだったっすか」

「明日電が降ると思い、強化魔法を」

ピークイの踵落しが俺の背骨に直撃した。かなり痛い、てか折れた。

「なんで、電が降ると思ったっす？」

ああやばい。

俺は背骨に回復魔法をかけながら、ピークイを見た。あれは鬼の目である、俺が鳴海の着替えを見てしまったときの目である。そしてその目に、嘘も偽りも無意味なことは、俺が体で実証済みだ。

「だっただって、ピークイ殿から声をかけていたくなんて、今までなかったもので、電でも降るのではないかと、気が気でなかったであります」

取り合えず、正直に言った俺だが、結局俺の運命は変わることはなかった。

『されど運命は回る』（後書き）

待っていてくれた方々、どうもすみません。

『されど運命は回る』悪魔の名

く健く

「真剣に聞いてほしいっす」

いつになく真剣なピークイ。まあ、俺に話しかけている時点で随分真剣なのは伝わってくる。俺はテーブルを挟んで、ピークイを真剣に見つめる。

「どうやら今、強力な悪魔が動いているみたイッス。悪魔の名前は『レイ』、その魔力量も半端じゃないっすが、頭も切れる面倒な相手ッス。」

ピークイの口から出た『レイ』という名前にオレは引かなかった。

「本当にレイという名だったのか？」

「一応本人はそう言ってるっす。もしかして知ってるっすか？」

「…………いや、多分違う」

「多分でいいっす！　いうっすよ！」

ピークイが俺に掴みかかる、服で首が締め付けられる、だんだんと息が苦しくなり、俺の顔が赤くなっていく。

「相手は悪魔っす、名の契約で同じ名前の悪魔はいないっす」

名の契約、それは天界の法律のようなものだ。悪魔や天使は、どんな理由があろうとも、同じ名前は付けられない。生まれたときに悪魔は魔王に、天使は神に名を受けるので、同じ名前になることはない。しかし、それには例外があり、神と魔王、そしてそのどちらかに認めてもらったものは、その名を変えたり増やすことができる。どちらにしろ同じ名前は付けられないが。

しかしそれはおかしい、少なくとも、俺はレイという名を持つものを知っている。

「おそらく、その悪魔は自分の名を偽っている、俺が知るその名の人物は、今はそれほど力を持っていない。」

そうだおかしいのだ、その名を持つものが、現れる筈がない。規則正しい時計の音が、やけに大きく聞える。直接頭に響くようだ。俺とピークイは、お互いにいやな汗を流し合っている。この沈黙がどうも痛い。

「そう……すか……。」

ピークイは、それ以上俺が何も言わないと解ったらしい、天使だって諦めが肝心だ。まあどんなにねばられても、これ以上しゃべるつもりはないが…。

「まあとにかく、そんなやからがうろついてるっす、気をつけてください。」

「ああ。もう手遅れだけど。」

「何かあつたつすか!？」

「うわ!」

急に立ち上がったピークイに驚いた俺は、そのままの勢で椅子ごと後ろに傾いた、何とか手を前に振り体制を整えようとするが、間に合わずそのまま重力にしたがって倒れていく。

グシャッ

ありえない音をたてて、俺の意識が落ちていく。その間に

(あつ、宿題やってない)

と思つたが、まあいいやとあきらめることにした。

『されど運命は回る』～悪魔の名～（後書き）

随分遅れてしまいました。今自分は、いろんな作品を見て修行中です、皆さんに楽しんでもらうために奮闘中です。これからも遅れると思いますけれども、これからもよろしく願います。

ご意見・感想・アドバイスがあれば、どんどん言ってください。

『されど運命は回る』～涙～（前書き）

最後まで書ききるので、受験生でもちよくちよくだします。

『されど運命は回る』く涙く

くアツ君く

自分がした事の重大さに気づくのは、いつも遅い。気づいたころには崖っぷち、振り返っても鬼がいて、どっちみち、その先にあるものは絶望だ。

「聞ってるの？アツ君？」

そんなことを考えても、今の状況を変えることはできない。

目の前に立つ怖い顔をした美琴

それを見上げるように正座させられている、悪魔。および俺。

なんと哀れな状況なのだろうか。仮にも、この俺は悪魔である。その悪魔が、主人とはいえ、一人の少女に正座をさせられているのだ。みつともないと思われるかもしれないが、普段怒らない人が怒るというのは、とても恐ろしいことなのだ。普段、俺に暴力の限りを尽くし、怒声を浴びせる、どっかの誰かさんとは、また違う怖さがあるのだ。

どうして、こんなことになってるかって？それは……

「どうして……来てくれなかったんですか……」

美琴の目に、光るものが溢れてきた。

俺が強盗に人質にされたとき、美琴は何度も俺を呼んでいた。それはもう何度も。思考が停止するんじゃないかと思うほどに……

「用事があった」

「人の命よりも大事な物　ですか！！？」

美琴が、俺のほうをキツ！と睨む。仕方なかったとはいえ、美琴は俺のこと（健一）を助けたかっただけなのに、その心の叫びに答えられなかったことは、俺もとても気がかりだった。

「美琴、やめなさい。悪魔なんかには解らないわ。私たち人間の『感情』なんて」

怒鳴り声を上げた美琴を止めたのは、鳴海だった。

俺は鳴海の言葉に、思考が冷めてきたことを感じた。たしかに、俺は何を考えているんだ。別に、悪いと思うことはないんじゃないか、はは、そうさ、俺は悪魔、みんなとは違う。俺がどんな行動しようと俺の自由だ。

「それでも……………」

美琴が何かを言いよどむ、何を言おうとゆづのだろうか。

「アツ君のこと……………信じていたんです」

「っ！ー！」

ジャキン

俺の鎧になる。

『アツ君のこと……信じていたんです』

なんだよ、俺を信じてるって。なんだよ、なんだよ、なんだよ

……
なんなんだよ……

俺は悪魔なんだぞ、お前らと一緒に居てはいけない存在なんだぞ、お前たちを騙しているんだぞ。なのに、信じるのか？信じてくれるのか。

なんだろう、この気持ちは、なんだか胸の辺りがキュウっとなる

「……アツ君？」

美琴が俺を驚いた顔で見てくる。隣の鳴海でさえも驚いている。どうしたというのだろうか、俺をじっと見て。顔は見えないから鎧に何かついてるのだろうか。

「……泣いてるの」

美琴の口からは、驚くべき言葉が出た。俺が泣いてる？そんなわけ

……

チャポン

何か、水が落ちる音。俺の真下から。

ゆっくりと下を見る。そこには赤い水溜り……それは確かに悪魔の涙だった。

『されど運命は回る』～俺の罪～（前書き）

お久しぶりですが、少しは頑張ったつもりです。楽しんでもらえれば幸いです。

『されど運命は回る』俺の罪

くアツ君

「……………泣いてるの」

喉がからからする、魔力が失われていく。俺の下にそんなに大きくはない水溜り。それは赤いが、間違いなく俺のだ。どうして？なんで…涙が出るんだ。

俺たちにとって涙とは、自分の力そのものだ。涙を流すことはすなわち自分の命を削っているのと同じ。だから悪魔は涙を流さない、それ以前に、悪魔に泣くという概念はないのだから。

それでも現に俺は泣いている、俺が涙を流したのはこれで2回目だ。

「アツ君…。」

「っ！」

美琴の困惑したような声と、鳴海の息を呑む音が聞こえる。

「これが……涙？」

「違う………のかな？」

きつと彼らにとって、悪魔の涙など伝説か何かだと思われるのだろう。実際、悪魔が人前で泣くなんて、きつとないのではないだろうか。いや、たしかどこかの書物に悪魔の涙のことが書かれていた、誰か見たものがいたのであろう。

この気持ちは何なんだろう。信じてるって言われて、俺は………何を思ったんだ。

わからない

こんな気持ち知らない

わからない

どうしてこんなにも

涙があふれるのだろう

「アツ君」

美琴の声で俺はハツとした。どれくらい意識が飛んでいたのだろう。かなり力が減っている。俺の下には赤い水溜りができていた。

「少し出かけてくる」

俺は美琴に返事することなくその場を去った。

く 鳴海 く

あいつ、なんなのよ。

美琴にパートナーができたと聞いてはじめは驚いた私だけど、本当に嬉しかった。

いつも契約がうまくいかず、自分には力がないとはかない笑顔を見せていた美琴。そんな彼女は、やはり天使たちにも相手にされず、契約なんてもう無理かもとなかばあきらめかけていた頃だった。

しかし、その契約者が悪魔だと聞いたとき、私は絶望した。なぜ、よりもよって美琴の契約者が悪魔なのだ。

悪魔…なんて忌々しい響きなのだろう。悪魔のせいで、一体何人の人間が死んだかわからない。いや、死んだだけじゃない、あいつらと契約した人間はみんな体と命、そして心を食われていった。

あの世に行くことも叶わず、跡形もなく。

そんな悪魔と、美琴が契約した。

美琴が奪われる…

そう思った。

私は絶対認めない、あんな血も涙もないような存在。いくら美琴に危害を加えないと主張したところで、所詮は悪魔、いつ裏切るかわからない。

この前だつてそう、ケンちゃんが人質に取られたとき。あいつは来なかった。きつと、影で笑つて言つたに決まつている。いいざまだと、ケンちゃんが苦しむのを見て、喜んでいたのだ。
あんな奴らに心はない。そう思つていたのに。

ポチャンッ

私は見てしまった。悪魔の涙を。

赤かった。底なしに赤くて、でも……とても悲しい色に見えた。
そのあと、しばらくジツとしていた悪魔は、ひとことだけ「少し出かけてくる」たったそれだけの言葉を残しそのばを去った。そのすぐ後を美琴が心配そうに追うのを眺めた後、仕方なしに私もあの悪魔を探すために走り出した。

くアツ君く

涙を流すなど、俺はどうかしてしまつたのだろうか？長い間……いや、ほんの十数年前か、人間にしてみれば長い時間だが、俺にとつてはさほど長い時間ではない。それくらい前に流したきりだったのに。

あの日のことは、忘れることはない。俺が悪魔であつて悪魔でなくなつた日のこと。

彼女は今頃何をしているのだろうか、あの日、俺が彼女に押し付けたもの、それはきつと彼女の重荷になつてに違いない。きつと彼女は、真実を知らないのだろうか。きつと、どっちの俺も恨んでいるのだろうか。それでも俺は……彼女に生きてほしかった。彼女にとつて重荷だったとしても、俺にとつては最後の贈り物だったんだ、二度と会えるなんて思えないから、俺は罪人で、本当ならあの

日に死んでいたんだ。でも……結局は俺のエゴだったんだ。ただ、彼女が死んだら、俺が悲しいから、俺の荷物をしよってもらってでも、生にしがみ付かせたかった。ただそれだけのことだったんだ。

お知らせいたします

今回感想の中に、話しの矛盾がある、誤字が多いということで、悪魔のおせっかいを書き直したいと思います。

かなりの時間がかかると思います。しかし、できるだけ急ぎます。なお、悪魔のおせっかいはそのままにして、しばらくは新しいものを「悪魔のおせっかい〜修〜」というタイトルになります。悪魔のおせっかいに話が追いついたところで一つ目の解除と、タイトル変更を行います。

大変ご迷惑をかけてすいません。

それから、投稿は私情のため20日まではほとんどありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5686h/>

悪魔のおせっかい

2011年3月4日11時39分発行